第2部

用具と人間の動作の関係の分析

非文字資料研究・身体技法研究の河野なりの受け止め方と調査の概要

―神奈川大学21世紀COEプログラムへの参加にあたっての基本姿勢―

河野 通明

ある共同研究プロジェクトに参加する場合には、構成員はプロジェクトの掲げるテーマを、天から降ってきたテーマでもなく人に与えられたテーマでもなく、自分自身の専門性やキャリアとどう関わらせて受け止め直し、テーマを自分自身のものとして内在化させるか、その姿勢が問われている。他の研究機関の共同研究に参加する場合なら、誘いを受け入れるか否か選択を迫られるので、その段階で自ずとこの問題と向き合うことになるが、自分の職場のプロジェクトの場合は、通例は業務として参加が求められるのであり、選択の余地はほとんどない。それだけにプロジェクトの掲げるテーマが自分の専門性とどう関わるのか、自分の専門性を活かす方向でチームにどう貢献できるのかについて、とくに自覚的に取り組む必要があると考える。今回のCOEプログラムでは、まさにこの問題で厳しい立場に立たされた。そこで5年間の成果の報告に先だって、まず私、河野通明がこのCOEプログラムにどういう姿勢で関わってきたかについて述べ、ついで5年間、実質は3年半の調査の概要について報告することにしたい。

Ⅰ　身体技法班における河野の基本姿勢

(1) スタート時点で2班の抱えていた問題点

テーマと配属メンバーのミスマッチ　多分どこの大学のCOEプログラムでも同様だと思われるが、申請したテーマに教員を配置する際に、必ずしも教員の専門性とうまく合致しているとは限らない。神奈川大学21世紀COEプログラムの2班もそのケースで、「身体技法および感性の資料化と体系化」のテーマのもとに配属された2003年の認可時点でのメンバーは、川田順造・河野通明・小馬徹・廣田律子・山口健治（50音順）の5名であった。このうち「身体技法および感性」そのものの研究をしてきたのは川田順造1人で、残る4人は異なる分野の研究者で、身体技法や感性に関して論文を書いている者は1人もいないという素人集団であり、他方4人それぞれが専門的に関わってきたテーマは2班テーマに取り入れられていない。

この点は看過できない重要な問題で、共同研究は専門性の異なるメンバーが共通テーマのもとに結集して、それぞれが違った角度からテーマを照射し、その結果を付き合わせ煮つめて新たな成果を導き出すものである。したがってテーマを先に設定するならそれに相応しいメンバーを配置すべきだし、メンバーが動かせないなら、その誰もが専門性を生かしてアプローチできるやや広いテーマ設定をすべきであるが、2班の場合は川田の専門性に合わせたテーマのもとに残る4人は専門性を考慮せずに適当に配されたという形になっている。このなかで、小馬徹は同じ文化人類学でも自分の研究と方向性が異なるので身体技法班には入れないとの理由で他の班に移籍した。

非文字資料である民具の研究テーマからの欠落　もう1点、河野は「非文字資料」そのものともいうべき「民具」が班レベルの研究テーマに入っていないことを問題にした。渋沢敬三は柳田国男の民俗学が精神文化に偏りすぎている点を指摘し、生活のなかで使われてきた道具類という物的資料からも庶民の歴史はたどれるはずだと「民具」という概念を提唱し、民具研究を育ててきた。その渋沢が創設したアチックミューゼアムの後裔が神奈川大学日本常民文

化研究所であり、その常民文化研究所を設立母体の1つとしてCOEプログラムが成り立っているにもかかわらず、そして「人類文化研究のための非文字資料の体系化」と「非文字資料」を大テーマに掲げているにもかかわらず、どうして班レベルの研究テーマに民具が入っていないのか、しかもここ20数年民具研究を続けてきた河野が専門外の身体技法班に配属されているのは、どう見てもアンバランスであり、常民文化研究所の代表として参加した河野としては素直に認められるものではなかった。そしてもう1点、神奈川大学は5年間のCOEプログラムが終えた後、非文字資料研究センター（仮称）を置いて研究を継続することが義務づけられている。文部科学省から助成金を受けられる5年間はいいとして、その後あらたに非文字資料研究センターを設立し経常費で維持していくのは、私立大学には大きな財政的負担となることが予想される。この状況下でこれまで日本常民文化研究所が扱ってこなかった身体技法が肥大化し、民具は除外されたままプロジェクトが進行したなら、5年後に日本常民文化研究所のあり方に深刻な問題を起こしかねない。そこでプロジェクトの出発にあたって、民具をテーマに織り込む修正がおこなわれない限り、河野はこのプロジェクトに参加はできないと主張したが、それに対する回答は、民具では申請は通らないと考えられたこと、またすでに提出して認可されたテーマに対する修正は不可能とのことであった。

申請書は大枠のプラン、具体化はメンバー各自の主体性で　そもそもこうした配置ミスの起こった原因の1つには、申請時の2002年度に河野は大阪の国立民族学博物館で国内研修中で職場にはいなかったこと、電話での参加の誘いを受けたとき、COEプログラムのなんたるかを十分理解しないまま承諾、その後送られてきた厖大な申請書類案に十分目を通してこなかったという問題があり、その責任は河野が負うべきものである。また申請書作成グループには民具の専門家は含まれておらず、昨今の民具研究はまだ一般にアピールするだけの成果をあげていないことからしても、民具がテーマから欠落したのもやむをえない側面は認めざるをえない。それにスタート時点で登録メンバーに辞退者が出ることは、士気の低下を招きプログラム全体に悪影響を与えかねないことは目に見えている。そこでひとまずは参加して、そのなかで打開の道を探ることにした。

考えてみれば限られた時間内で厖大な書類を作成するとなれば、細部まで目が届かないことは当然ながらあり得ることで、また申請したテーマに教員を配置する場合、テーマのために新規採用できるわけではなく既存の教員を配置するために、多少のミスマッチを感じながらもとりあえず近い専門の者を当てはめるという形をとらざるをえないと考えられる。したがってそのズレをどう解消しプロジェクトを軌道に乗せるかは、プログラムに参加する個々の教員自身に委ねられているのであろう。さらにまたCOEプログラムが研究のプロジェクトであり、高い水準の研究成果が求められている。またその高い研究水準は参加者がそれぞれの専門性を堅持してこそ得られるもので、川田以外のメンバーが専門性を捨てて身体技法のテーマに唯々諾々と従うなら、共同研究とは名ばかりの生涯学習のお勉強会になりかねないことは明らかである。したがって班レベルのテーマに関しては、参加者各自による主体的な読み替えは必須の条件であり、文字づらに忠実に従うことの方がかえってCOEプログラムの主旨に反することになるとも考えられる。

大局的な観点から見れば、神奈川大学が文部科学省に対して請け負ったのは「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の大テーマであって、班テーマはその実現のための施行細則に相当する。したがって神奈川大学COEプログラムが守らなければならないのは「非文字資料の体系化」という大テーマであり、班テーマに関しては、個々の参加者が自分の専門性にあわせて具体的に読み替えることが許されている、というよりは高い研究水準の成果を出すために、むしろ主体的な読み替えこそが求められているのであろう。そう了解して河野は2班＝身体技法班に留まりながら、自分の専門性を堅持しつつ身体技法を自分の専門性に引きつけて関わる道、そして1段階上の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という総括テーマのもと、渋沢以来の民具

研究をCOEプログラムの枠内で正当性をもって継続できる道を模索することにした。

(2) 2班における身体技法研究の具体化

主要メンバー3人における身体技法研究の具体化
川田・河野・小馬・廣田・山口の5名でスタートした2班であったが、小馬の他班への移籍で4名となり、そのうち山口は学部長の激務と重なったため、身体技法研究の主要な担い手は川田・河野・廣田の3名となった。

川田は蓄積の上に研究を深化　川田はマルセル・モースが1936年に提起した「身体技法」が身振りによる表現・伝達や、文化の中の象徴性の面に限られ、道具・住居など物質文化や技術との関連が抜けていると指摘して、生産・生活のなかの身体技法を広く取りあげて道具・技術との関連を追究し、西アフリカ・フランス・日本の3点から原理の違いを抽出して対比するという比較研究をおこなってきた。[(1)] これは人種的にはネグロイド・コーカソイド・モンゴロイドの比較となるが、日本については自文化であることと、広く世界に展開したモンゴロイドのなかでは、東アジアの周縁の島国でやや特異な存在であることから、モンゴロイドを広く捉え直すために、COEプログラムではあらたにユーラシア大陸のモンゴロイドとしてモンゴルを、アメリカ大陸に展開したモンゴロイドとしてメキシコを調査し、研究の深化・充実化を図った。

廣田は身体技法の定量比較　廣田は中国をフィールドとしてきた芸能研究者であり、地域社会に隔てなく溶けこむ感性と行動力の持ち主である。その廣田は近年学界で主として理系の研究者によってモーションキャプチャーを用いた研究が始まっていることに目をつけ、秋田県のわらび座の芸能研究所と組んで、東アジアの芸能の収録を始め、文系の芸能研究者の視点から分析するというあらたな取り組みを始めた。2班のテーマは「身体技法と感性の資料化と体系化」であるが、芸能の所作は身体表現であり、身体表現は日常生きるための活動のなかで身体に染みこんだ身体技法と感性との接点で形成される。したがって「身体技法および感性の資料化と体系化」という2班のテーマを自身の専門性に引きつけて具体化したもので、モーションキャプチャーを使っての定量比較は、これまでの定性的な身体技法研究を一歩超えるもので、「21世紀」COEプログラムに相応しい内容が付されることになった。

河野は木摺臼からの民族分布の復原　河野は1981年来、各地の博物館・資料館の収蔵庫を回って在来農具の比較調査をおこなってきたというキャリアがある。このなかで気にかかっていたのが籾摺り用の木摺臼の作業姿勢で、朝鮮半島では立位で上臼から突き出た把手を前後に動かして往復回転させていたものが、日本に伝わると2人が腰を下ろして向き合い、上臼に結いつけられた左右の縄を交互に引いて往復回転させる形にかわる。ところが東北地方に伝わると再び立位に変わるようで、その途中経過と思われる縄結い穴に棒をつっこんでクランクとしたようなタイプが18世紀の菅江真澄の紀行に描かれている。この作業姿勢の変化は担い手の民族の違いを反映しているのではないかと考えていた。

東北地方はかつては蝦夷の国であり、縄文人の子孫が暮らしてきた地方である。それに対して西日本は弥生時代にアジアから侵入してきた稲作民が支配権を握った地方で、しかも稲作民は1種類ではなく最初に朝鮮半島からの移住があり、その後に江南地方から漢族に追われた少数民族系稲作民が入ってきたと考えられる。この結果、弥生時代に日本列島は3民族が住み分ける多民族社会となった。その後、大和政権をつくり律令国家を作ったのは少数民族系稲作民であろうという見当をつけている。政権を握ったヤマト勢力によって大和語が標準語となり、大和中心の日本文化が形成されていくが、そのベースには多民族社会の文化の違いが存在すると考えられ、それが現象として現れているのが江戸時代以来多くの人々の関心を集めてきた「東日本と西日本の文化の違い」であろう、という仮説を河野は描いている。したがって「東日本と西日本の文化の違い」の研究を一段階進めるには、ベースになった民族構成の違い、卑弥呼の統一によって基本的には固定された3世紀段階の民族分布の復原がこれからの大きな課題と認識し、木摺臼の作業姿勢の違いはその民

族分布の復原の手がかりとなるのではないかと考えてきた。

木摺臼の作業姿勢の違いは、把手の高さや駆動方法の違いとして民具に刻印されており、使い手が座位が楽と感じるか、立位を楽と感じるかという作業姿勢の違いは、まさに使い手の身体技法の違いであり、身体技法の違いは使い手の生活文化の違いであり、生活文化の違いは多民族社会では民族集団の違いを反映している可能性が高いことからして、木摺臼の形態の違いは民族分布を復原する手がかりとなる。こう考えて「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原」を河野の2班での具体的テーマに設定した。

(3) 2班にありながら民具を取りあげる理由と論理

非文字資料の理論的整理　冒頭に指摘した「非文字資料の体系化」を総括テーマに掲げたCOEプログラムでありながら、非文字資料そのものともいうべき民具の班テーマからの欠落、これをどうするかは河野にとっては避けられない課題であった。そのためには非文字資料とは何かについて、煮詰めた考察をおこなう必要があり、その試案を理論総括編の報告書『非文字資料研究の理論的諸問題』に河野「神奈川大学21世紀COEプログラムにおける『非文字資料の体系化』とは何か」として投稿しておいた。

その内容を要約しておくと、まず「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という「人類文化」については、人類の初期の文化、たとえば道具を作って狩りをするとか、寒さ対策や猛獣よけに火を起こして使うとか、寒さ対策に衣類を作って身にまとうなど、本能を超えた工夫を次の世代に教育して伝えていく文化は、過酷な自然環境に対応するなかで生み出されたものである。のちに人類社会が大きくなり大集落や都市が出現して社会が複雑化してくると、人間関係・社会関係に関わる文化が形成される。つまり人類文化は図1に示したように、①自然環境に適応するために生み出された文化（第Ⅰ類の文化）の上に、②人間関係・社会関係のなかで生み出された文化（第Ⅱ類の文化）が重なるという二重構造をなしている。そして図2に示したように、技術が進み機械化が進んで自然の脅威が薄れるにつれ第Ⅰ類の文化の比率が小さくなり第Ⅱ類の文化の占める割合が大きくなってくる。これは産業別人口の比率で見れば、自然を相手に食料を確保する農林水産業といった第一次産業従事者が人口の大部分を占めていた段階から、今日のような商業やサービス業などの第三次産業従事者が過半を占めるようになってくるという産業構造の変化とリンクしている。

これを文字資料と非文字資料との関係から整理すると、文字資料は第Ⅱ類の文化、人類社会内部の記録が中心であり、人と自然との関わりに関する記録は少ないこと。古代では階層的には王や貴族の記録が中心で庶民に関する記事は少なく、空間的には都に厚く地方に薄いという傾向性をもつ。そして文字資料の残り方は近現代はあふれるほど多いのに対して時代を遡れば加速度の逆数をとったように減少するので、過去に向かっての射程距離は短いという限界をもつ。それに対して偶然に残った痕跡である非文字資料の方は、たとえば遺跡の発掘によって旧石器時代・縄文時代が復原できるように、過去に向かっての射程距離は長い。そして民具は、これまで民俗学系民具研究者による聞き取り調査中心の研究方法では、見えてくるのはその民具が使われていた明治・大正・昭和期であり、紀年銘や農書との関連で研究しても視界の上限は近世前期であり、中世以前はかすんで見えない。ところがいま河野の進めている「民具からの歴史学」の方法を使えば、馬鍬からは5世紀、犂からは6世紀、7世紀の地域ごとの歴史の復原が可能となってきている。民具という非文字資料の可能性が飛躍的に拡大したのである。

民具はかつて渋沢敬三らによって「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身辺卑近の道具」（1936年）と規定されたが、70年前のこの規定は現時点では問題が多い。河野は東アジアに視野を広げた広域比較から、民具は形を変えずに継承されるのが基本であり、したがって形や呼称には朝鮮系・中国系といった古代の情報が遺伝子のように継承されていること発見、これを「歴史民俗情報」と名づけて、「民具」の概念を「民具とは、さまざまな歴史民俗情報をもった道具類」と規定し直した。

図１　文化の二重構造

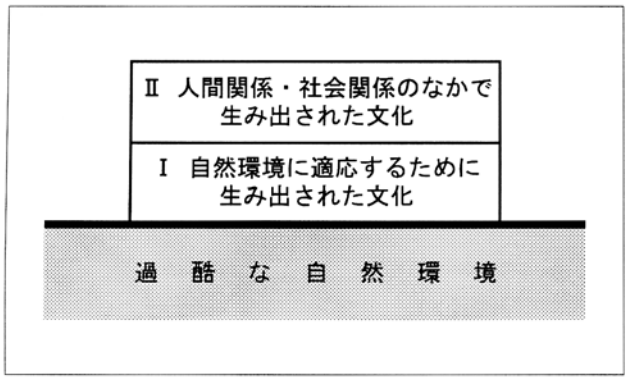
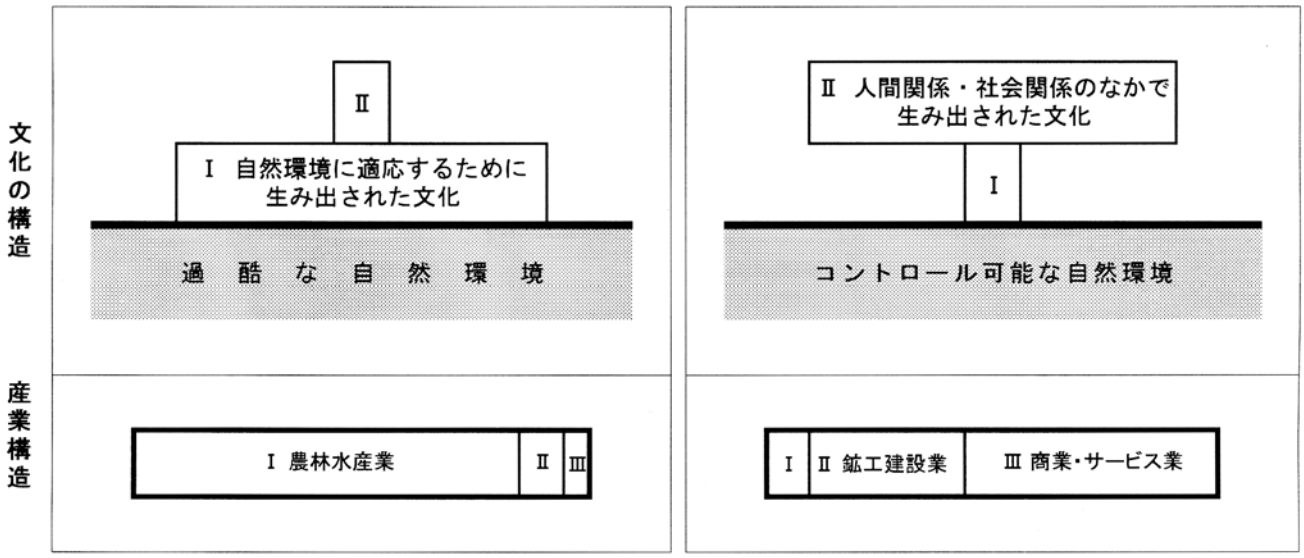


図２　文化と産業の構造変化



自然経済の社会　　科学技術の発達した社会

図３　文字資料と非文字資料

人類活動を伝える資料	記録・記憶資料群 人が何らかのメッセージを伝えようとした資料	未文字資料	口頭伝承	文法コード化されたもの：デジタル資料	広義の文字資料
		文字資料	文字記録		
		準文字資料	図像（絵画資料と彫刻）	文法コード化されていないもの：アナログ資料	広義の非文字資料
	痕跡資料群 生きるための活動のなかで、主目的とは違った歴史民俗情報が偶然に残ってしまった資料	非文字資料	民具（さまざまな歴史民俗情報をもった道具類）		
			遺構（田畑・城跡・道など景観に刻まれた人間活動の痕跡）		
			民俗技術（伝承された手仕事のわざや道具の使い方）		
			身体技法（文化によって条件づけられた身体の使い方）		

有形資料
無形資料

∴非文字資料とは、文字以外の資料で人類活動の痕跡をとどめているもの

この過程で文字資料と非文字資料の種類と関係を整理したのが図3である。

この表でも分かるように、COE 1班が取りあげている図像は非文字資料とはいっても準文字資料であるのに対して民具は非文字資料そのものであり、絵画資料よりも圧倒的に多い資料が全国各地の博物館・資料館に収集され調査研究をまっているのである。したがって渋沢敬三の流れをくむ日本常民文化研究所を拠点の1つとして形成され、「非文字資料の体系化」を看板にかかげるCOEプログラムが、民具という非文字資料研究に取り組むのはむしろ当然であるという根拠が明確になった。

身体技法調査から民具という非文字資料の調査へ　河野のおこなってきた民具調査では、県内の資料館をくまなく回るという全域調査・面的調査が基本となる。いい資料のあることが分かっている資料館をねらい打ちしたつまみ食い調査は、調査者の主観に左右された見込み捜査となる恐れがあり、面的調査で調査者が予期せぬ資料に出会って戸惑い、仮説の修正を繰り返すなかでこそより確実性の高い実証的成果が得られるからである。この方法で木摺臼調査をおこなうとき、数日かけてある地方の資料館を何カ所も回ったが、木摺臼には1例も出会えなかったというケースは当然ながら起こりうる。しかしながら分布調査では、この地方の資料館には木摺臼は無かったという事実の確認が大事なので、決して空振りや無駄足などではない。ところで面的調査をおこなうと、そこには当然ながら木摺臼以外の民具も収蔵されている。たとえば初年度の2003年は8月に岩手県調査から始めたが、COE調査第2日目に訪れた二戸市歴史民俗資料館で、「引手なし馬鍬」という予期せぬ資料に出会った。引手のない馬鍬は近世絵画に時折描かれているが、引手が無ければ馬鍬は安定せず、実用はほとんど不可能と考えられるので、絵師の間違いであろうと片付けていた。その現物が存在したのであり、「新発見」であった。これに勇気を得て木摺臼調査のかたわら馬鍬の形態にも目配りした結果、飛び石状ではあるが何例か発見することができ、結論的には引手なし馬鍬はそれまで馬鍬を使ってこなかった人が、他地方で馬鍬を見かけた記憶にもとづいて再現製作したために起こった形態で、東北地方が5世紀段階には大和政権の支配下に入っていなかったという歴史的事実と符合し、かつて関東以西の馬鍬調査から導いた馬鍬の5世紀江南地方伝来説の正しさが、思わぬところで検証される結果となった。この成果は年度末に河野通明「東北地方の引手なし馬鍬」(2004)[(2)]として発表した。

こうした経過を経て、COE予算を使った身体技法検出のための木摺臼調査のなかで、同時並行で民具という非文字資料研究のための調査をおこなうことが可能との確信を得た。そこで申請時に抜け落ちていた民具を正面に据えて、総括テーマの「非文字資料の体系化」を「民具という非文字資料の体系化」と具体化し、2班の身体技法班に属しながら、身体技法予算を有効利用する形で、在来農具の比較調査に全面的に取り組むということにした。これで渋沢敬三に対しても顔が立つことになった。

東北地方は木摺臼、中部地方は在来犂　5年間のCOE予算がついたとはいえ調査は最初の3年間で、残る2年はまとめの期間で調査予算無しという方針であり、調査は3年間である。さて調査するとなれば日本列島は限りなく広く、とてもカバーしきれるわけはない。そこで20年来のフィールドである西日本は既調査のデータに依ることにして調査地域は基本的には東日本に絞ることにし、そのなかで関東地方は日帰り調査も可能なので私費調査などでカバーすることにして大型予算は遠出を基本とし、3年間の前半は東北地方、後半は中部地方調査に充てることにした。籾摺臼の木摺臼は江戸時代に土摺臼への置き換えが進んだため、西日本や関東地方ではほとんど消え去っているが、東北地方と中部地方はなお民具例があることがこれまでの刊行物からつかめていたからである。

調査の結果はやや予期せぬ展開となった。木摺臼からの身体技法検出は東北地方調査で南から北へ、座位から立位と変化する様子がグラデーションをともなって表現できるほど明確な成果が得られたのに対して、中部地方は木摺臼はたしかにあるものの、幕末から明治にかけて木摺臼が改良され進化するという、研究者が思っても見なかった事実が発見され

た。ただこれを正確に跡づけるには腰を据えて時間をかけての調査が必要なので、今回は発見の報告に留めざるをえない。木摺臼からの歴史的遡及研究では不作だった反面、中部地方各県では何例かの在来犂に出会うことができた。中部地方の在来犂はこれまでまともに調査されたことはなく、西日本中心に調査してきた河野にとっても未踏査地である。河野は西日本調査データから在来犂の形態比較から地域の6～7世紀史を読み分ける定理を提示し、「民具からの歴史学」の方法論の確立を急いでいるが、中部地方の在来犂群はこの定理が東日本にも通用するのか、定理の正しさの検証材料となりうるのか否かを確かめる格好のフィールドとなったのである。

そこでその成果をまとめたのが「民具という非文字資料の体系化のための在来犂の比較調査」であり、本稿の第3論文となっている。

(4) 課題名「用具と人間の動作の関係の分析」との関係

5年間のプロジェクトが第4年目に入る2006年度に、班編成から課題別編成に組織替えがおこなわれた。同時に2003～2005年度の前半3年間は調査の期間、後半の2006～2007年度の2年間は報告書のまとめの期間で原則として調査予算は無しとの原則も再確認された。そして2班は第1課題「身体技法の比較研究」と第2課題「用具と人間の動作の関係の分析」に分割され、第1課題には廣田（代表）・川田・山口・夏宇継の4人、第2課題には河野1人が配された。この人員編成も課題名も班構成員側に相談はなく、上意下達の通達であった。

「用具と人間の動作の関係の分析」の問題点　この「用具と人間の動作の関係の分析」という課題名は、かねてから川田が取り組んできた課題であって、河野が3年間おこなってきた研究内容ではない。たとえば犂は牛馬に引かせて田畑を耕す道具であり、その形は基本的には牛馬に引かせて田畑を耕すに適した形で作られているので、何も知らない人が収蔵庫で犂を見ても、それが牛馬に引かせて田畑を耕す道具であることは分かる。これが道具の形が持っている「機能情報」である。ところが犂の構造は地方によって三角枠犂であったり四角枠犂であったりするが、これは農家の人の工夫ではなく、彼らの意図とは無関係に昔からそうだったのであり、農家の人は毎日を生きる道具としてその形と使い方を子孫に伝えていく。ところでこれまでの農業技術史研究ではこの骨格構造の違いを地形や土質に適応したものであるとの合理的解釈を試みてきたが、それがまったくの見当外れでじつは三角枠犂は朝鮮系であり、四角枠犂は中国系かまたは両者の混血型であることは河野が明快に論証した。この地形や土質とは関係なく、朝鮮系か中国系か混血型かという系譜関係や歴史的事情によって決まってくる要素を河野は「歴史民俗情報」と名づけ、それが非文字資料であり、民具という言葉を「民具とは、さまざまな歴史民俗情報をもった道具類」と規定し直して、「用具と人間の動作の関係」とは無関係な非文字情報の抽出作業を広域比較という方法で続けてきたのである。

班編成から課題別編成に組織替えがおこなわれた2006年度は、報告書のまとめに入る年度であり、したがって課題名は3年間どんな研究をやってきたかという内容をたった1行に凝縮して述べなければならない、そんな場面なのである。であってみれば、これは当然課題責任者に起草させるべきであったし、申請までに時間がなくて急いでいるのであれば、推進会議本部で策定した案を提示して、「こういう風に変更したいがどうですか。ただ申請まで時間がないので一両日中にメールで返事してね」という問い合わせがあって然るべきであった。

新版「概要」での課題解説　神奈川大学21世紀COEプログラムでは、プロジェクトの全体像を対外的にアピールするために、『人類文化研究のための非文字資料の体系化』というA4版見返し含めて18頁立てのパンフレットを作成しており、内部では『概要』と呼んでいる。2006年度の改組によって、当初の4班体制が6班11課題体制となり、メンバーにも多少の異動があったので、『概要』の改訂がなされ、2007年3月、つまり2006年度版として発行された。この改訂にあたっては、課題ごとに300字前後の内容の解説が付されることになり、担当者にその執筆依頼がきた。そこで河野は解説文を

作成し、それが印刷され、文部科学省にも外部の関連機関にも送付されて、公式文書としてオーソライズされた。その内容は次の通りである。

（2班）課題2 用具と人間の動作の関係の分析

用具や道具・民具とよばれるモノ資料に注目、それらを使用する人間の身体技法、具体的には作業姿勢との関連で分析し、そこに長い歴史を発見することを課題としている。長い歴史のなかで作られ、継承されてきた用具は学術的には民具と名付けられて研究されてきた。本課題では、民具のうちから農具、特に犂を取り上げて、調査分析し、日本列島における民族形成過程、さらには東アジアにおける民族移動を復元し、人類文化の歴史を明らかにする試みを具体的な課題として設定している。そのため、日本全国の調査を進め、併せて民具という非文字資料の人類文化研究のための有効性の検出と方法論の確立を目指している。

ここでは「用具と人間の動作の関係の分析」という課題名を具体的に述べるという形をとり、読者に違和感を感じさせないように配慮しながら実際におこなってきた事業内容を説明するという形をとった。

（5）報告書は3部構成で

以上述べてきたように、①成果報告書は予算を費やしておこなってきた事業内容の報告でなければならず、したがって民具調査にもとづく非文字資料研究でなければならず、②その事業内容に沿った解説文は公式文書としてオーソライズされており、③「用具と人間の動作の関係の分析」という課題名は事業内容を十分把握できない立場の人でかつ専門分野外の人が一方的に決めたものであって妥当性をもたないことからして、実際の報告書作成にあたっては、課題名の文字づらは無視する形で、実際の研究内容に沿って、

- 非文字資料の体系化の河野における具体化（本稿）
- 身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原
- 民具という非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査

の3部構成をとることとした。もっとも実際の内容では、木摺臼の把手の形状と作業姿勢の関係や、山梨県の犂の大型化と肩押し走行の関係など、用具と人間の動作の関係の分析は十分おこなっている。

Ⅱ　COE民具調査の概要

（1）実施した調査とその性格

分布確認のための駆け足調査　神奈川大学21世紀COEプログラムは、2003～2007年度の5カ年であったが、初年度は文部科学省の認可が遅れて新年度にずれ込んだことと、4～7月の授業期間中は調査時間は取りがたいこともあって、実質の調査開始は夏休みの8月以降となった。また最後の2年は調査打ち切り、まとめの期間とされた2006年度にも若干の追加調査予算が認められた結果、図4のように合計36回、のべ123泊158日、訪問先は414施設、平均すると1日2.62施設、教育委員会のような事務局的施設を除いても18道県で392施設という、まさに駆け足の所在調査となった。考古学にたとえれば遺跡候補地の表面採集と時間があれば試掘のトレンチを入れて分布確認のために駆け回ったというところである。ただ木摺臼や在来犂が確認された場合は可能なかぎり計測に時間をかけた。

東北地方・中部地方に力点を置いた面的調査　調査地の選定は、すでにのべたように、① これまで河野が主として回ってきた西日本は後回しにして、ほとんど未踏査の東日本を中心にすること。② 分布調査は調査地点の多い少ないが得られる成果の多少にもろに比例する。そこで学生・院生を引率しての調査は予算的には制約があるので、費用を抑えた一人調査で調査地域・調査地点を可能な限り増やすこととし、③ 面的調査の必要から機材を送りつけたビジネスホテルをベースキャンプとして、レンタカーで1日最低2カ所を目標に近辺の博物館・歴史民俗資料館の収蔵庫、教育委員会の受贈民具収蔵施設を出来るだけ多く調査すること。④ 夏休み・春休みといった休暇だけでは東日本の全域調査は無理なので、前期・後期の授業期間にも調査を組み込むこ

図４ COE国内民具調査　回数・日数・訪問先

年度	回数	泊	日	日/回	訪問先	施設数/日
2003	10	29	39	3.9	90	2.31
2004	9	40	49	5.4	126	2.57
2005	13	42	54	4.2	171	3.17
2006	4	12	16	4.0	27	1.69
計	36	123	158		414	
平均				4.39日/回		2.62施設/日

・教育委員会事務局など民具のない施設も含む

図５ COE国内民具調査　調査施設数

地方	道県	日数と構成比				施設数			
		回	日	計	%	延べ	計	除複	計
北海道	北海道	1	3	3	1.8	8	8	8	8
東北	青森	3	9	72	43.9	17	159	14	142
	岩手	4	13			32		28	
	宮城	3	8			17		16	
	秋田	4	17			43		39	
	山形	5	15			33		28	
	福島	3	10			17		17	
関東	千葉	1	3	3	1.8	5	5	5	5
中部	新潟	1	9	62	37.8	30	160	29	142
	富山	5	15			42		33	
	石川	2	5			15		14	
	長野	6	16			38		34	
	山梨	2	7			12		10	
	静岡	3	9			21		19	
	愛知	1	1			1		1	
近畿	三重	2	8	8	4.9	24	24	22	22
中国	山口	3	11	11	6.7	25	25	21	21
四国	愛媛	1	5	5	3.0	12	12	12	12
九州	―	0	0	0	0.0	0	0	0	0
計	18	50	164	164	99.9	392	392	350	350
延べ2.4施設/日、重複を除けば2.1施設/日									

・教育委員会などの事務局的なところは施設数から除いた
・「除複」は2度目以降の調査施設を除いた数字

と。そのため週9コマの授業は月・火に集約し水曜は会議日、残る木・金曜日に会議などに公務、土・日に研究会等のない週をねらって木・金・土・日の3泊4日の調査を可能な限り組むこととした。

これと併せて、私費による追加調査もおこなった。COE調査を始めた2003年8月以降、執筆時点までの私費調査は、図6のように36回52日で、17県の延べ76施設を回った。これらは博物館・資料館で講演を頼まれた際の前後の調査、公務出張の終わったあとの立ち寄り調査、ゼミ合宿の前後に実施した

図６ COE予算外　民具調査県別集計

地方	県	日数と構成比					訪問施設数			
		回	泊	日	計	%	延べ	計	除複	計
東北	福島	1	2	3	3	5.8	2	2	2	2
関東	茨城	1	0	1	25	48.1	1	33	1	25
	群馬	3	3	6			11		11	
	埼玉	2	1	3			4		3	
	東京	2	1	3			5		5	
	神奈川	12	0	12			12		5	
中部	富山	1	2	3	17	32.7	4	27	2	24
	長野	4	2	6			12		12	
	山梨	2	3	4			5		5	
	静岡	1	0	1			1		1	
	岐阜	1	2	3			5		4	
近畿	滋賀	1	0	1	6	11.5	1	10	1	10
	大阪	1	0	1			1		1	
	奈良	1	0	1			1		1	
	和歌山	1	0	1			2		2	
	兵庫	1	1	2			5		5	
四国	香川	1	0	1	1	2.0	4	4	4	4
計	17	36	17	52	52	100.1	76	76	65	65

・「除複」は2度目以降の調査施設を除いた数字
・教育委員会などの事務局的なところは施設数から除いた

長野県や山梨県調査など、落ち穂拾い的調査と、COE予算は遠くの宿泊調査にあて、近場は暇を見ての日帰り私費調査で補ったという関東地方調査が含まれている。

分布確認のための未整理資料も含む調査　今回の調査は分布確認を主とした面的調査であり、展示資料だけではなく資料館の収蔵庫、教育委員会の収蔵施設を見せてもらうことに力点をおいた。博物館・資料館については日本博物館協会『全国博物館園職員録』が手掛かりとなったが、館のない各市町村でも住民からの受贈民具を小学校の空き校舎や今は使われていない公共施設に保管しているケースがある。これらは分布調査では資料館収蔵庫とならぶ重要資料であるが、どの市町村にどんな収蔵施設があるか、収蔵庫・収蔵施設にどんな農具が収集されているか、それがどんな形かは行ってみないと分からず、たとえば収蔵民具のなかに木摺臼があるか、在来犂があるかなどは担当者にも把握されているとは限らないので電話では不十分であり、また行った先でどれくらいの調査時間を要するかは、その資料の有り様に左右されるので、これも予想がつかず、そのため多くの場合は1施設の調査が終わった段階で次の

施設に電話するか、あるいは飛び込みで事情を話してお願いするというアポなし調査となることもしばしばあった。にもかかわらずよく事情を分かっていただいて仕事中にも時間を割いて施設まで案内していただくなど、好意的なご協力をいただいたおかげで、1日に数カ所を駆け回るという調査が実現できたのである。この点は感謝の極みである。それだけに成果報告の責任を重く受けとめている。

民具の多くは住民からの連絡で引き取った受贈民具であり、未整理のまま小学校の空き校舎や今は使われていない公共施設に詰められた状態のものが多い。担当の方々は整理の必要性を感じながらも幾種類もの公務の掛け持ちのなかで整理もままならぬという状況にある。したがってとてもお見せできる状態ではないとか、いつか整理ができたらその折りにといわれる場合もあったが、山積みの状態でも木摺臼の有無や形態が目視確認できれば、それはそれなりに分布状況の重要資料となるからと説明して納得してもらい、その状態で写真を撮らせてもらった場合もしばしばあった。

写真の公開については今回は特殊なケース　一般に公的資金で調査をおこなった場合は、調査で得られた資料は公開されるのが原則である。COEプログラムもそうした公的資金調査である以上、18道県で392施設も回ったとなれば、データベースとして公開するのが一般には期待されるのであろう。

ただ今回の調査は特殊なケースである。収蔵庫は一般には非公開のものである。それを無理を承知で調査させてもらった場合の暗黙の了解は、こちらは無理を聞いてもらって見せてもらうが、その見返りとして全国的な比較のなかでその民具はどんな位置を占めるのか、どんな性格をもつのか、あるいはその民具からどういう歴史が復原できるのか、そうした研究結果が出た場合には、その成果をお返しする、それによって収蔵民具の意味合いがはっきりする、というギブアンドテイクの関係である。

この点は、市町村史の民俗編の編纂に関わる民具調査や資料館自身のおこなう収蔵民具の整理とは意味が異なる。これらの場合は全点が写場で撮影され計測されて目録化され公開される。それに対して今回の調査は、資料館の民具整理を請け負ったのではなく、全国比較のために無理を承知でお願いした面的な分布確認調査である。したがって調査の過程では未整理の山積み状態のものも比較研究資料として撮影させていただいたが、それらは将来資料館の手で整理されて公開されるべきものであり、それをただ資料集的に公開することは信義に反する。したがって何らかの全国的な視野からのコメントや、歴史的位置づけをともなった論考の資料という位置づけができた場合にのみ、必要なものを掲載するという方法をとった。

(2) 年度別に見た調査の概況

図7に今回の調査先を時間経過にしたがって年度別に掲げた。この表にそって調査の概況について見ていきたい。

2003年度の調査　2003年度は、8月から東北地方の太平洋側と青森県を中心に調査を始めた。木摺臼に関しては南から北へ縄引き型、押引棒型、2本把手型、4本把手型と分布が変り、それが座位 → 腰掛け操作 → 立位と対応するという、予期した以上の成果を得た。また馬鍬については、すでに述べたように二戸市などで引手なし馬鍬を発見、小川原湖民俗博物館では収集された馬鍬の整理から、明治以降に引手なし馬鍬から鉄棒引手後付にかわり、やがて鉄棒引手が当初から付けられて定型化するという、東北地方の近代が見え、「民具からの歴史学」の可能性の豊かさを確認することができた。

北海道については、北上山地の踏鋤との関連が気にかかっての調査であったが、北海道の農具については和人の持ち込みも考えられ、資料も少なく今後の調査にまつ結果となった。

また鍬柄から地機まで、一木造りで成形する民具が数多く見られ、一木造りは縄文系住民の製作であろうという予測がほぼ当たること、こうした民俗技術が古代の民族分布図を描く際の手がかりになるであろうとの感触を得た。

2004年度の調査　2004年度は、東北地方の日本海側の秋田・山形県と福島県を中心に調査した。木摺臼については太平洋側に比べて残りが悪く、土摺臼

図７ COE 民具調査 ２班第２課題　河野 通明

２００３年度

県	調査日	泊	日	調　査　先
青森	03.8.16	6	7	八戸市博物館
岩手	03.8.17			種市町立歴史民俗資料館
				軽米町歴史民俗資料館
				二戸市歴史民俗資料館
				浄法寺町歴史民俗資料館
	03.8.18			北上市立博物館
	03.8.19			岩手県立農業科学博物館
				牛の博物館（前沢町）
	03.8.20			川井村北上山地民俗資料館
				遠野市立博物館
				東和町ふるさと歴史資料館
	03.8.21			碧祥寺博物館（沢内村）
				湯田町歴史民俗資料館
				住田町民俗資料館
	03.8.22			道の駅厳美渓（一関市）
				平泉郷土館
				胆沢町文化創造センター郷土資料館
				岩手県立博物館
青森	03.10.9	4	5	青森県立郷土館
	03.10.10			中里町立博物館
				市浦村歴史民俗資料館
				板柳町立郷土資料館
				板柳町教育委員会
	03.10.11			深浦町歴史民俗資料館
				金木町歴史民俗資料館
				五所川原市　旧平山家住宅
				五所川原市歴史民俗資料館
	03.10.12			弘前城史料館
				平賀町郷土資料館
				田舎館村埋文センター
				田舎館村博物館
				青森市歴史民俗展示館（稽古館）
	03.10.13			青森県立郷土館
北海道	03.10.23	2	3	北海道開拓記念館
				北海道開拓の村
	03.10.24			アイヌ民族博物館（白老町）
				仙台藩白老元陣屋資料館
				苫小牧市博物館
	03.10.25			北海道大学植物園
				北方民族博物館
				恵庭市郷土資料館
				恵庭RBパークセンター
				カリンバ３遺跡展示室
宮城	03.11.19	3	4	小牛田農林高校
				斎藤報恩農業記念館跡
	03.11.20			豊里町教委
				竈神収蔵庫・民具収蔵庫
				桃生町教育委員会
				桃生町町民総合センター
				民俗資料館
				登米町教育委員会
				大野家歴史民俗資料館（登米町）
	03.11.21			金成町歴史民俗資料館
				迫町歴史博物館
				旧亘理邸・民具展示館
	03.11.22			仙台市歴史民俗資料館
岩手	03.12.18	2	3	平泉郷土館 ②
				千葉信胤氏宅倉庫（平泉市）
	03.12.19			岩手県立農業科学博物館 ②
				胆沢町文化創造センター郷土資料館 ②
	03.12.20			遠野市立博物館
青森	04.1.22	2	3	小川原湖民俗博物館（三沢市）
	04.1.23			小川原湖民俗博物館 ②
	04.1.24			小川原湖民俗博物館 ③
岩手				岩手県立農業科学博物館
宮城	04.3.1	2	3	瑞巌寺宝物館
				塩竈神社博物館
				北上川運河交流館　水の洞窟
	04.3.2			仙台市歴史民俗資料館 ②
				向田収蔵庫
				角田市郷土資料館
	04.3.3			東北歴史博物館
静岡	04.3.9	2	3	静岡市立登呂博物館
	04.3.10			静岡市立登呂博物館 ②
				静岡市立大谷小学校郷土室
				静岡市立登呂博物館 ③
				掛川市民具収蔵施設
	04.3.11			大井川町民俗資料保管庫
				藤枝市郷土博物館
福島	04.3.20	2	3	只見町教育委員会
	04.3.21			朝日公民館の民具収蔵庫
				川のものしり館
	04.3.22			金山町こぶし館
				民俗資料展示室
愛媛	04.3.27	4	5	北条市立ふるさと館
				民具保管庫
				東予市立郷土館・図書館
	04.3.28			かわのえ高原ふるさと館
				川之江城収蔵庫
				新居浜市立郷土美術館
				西条市立郷土博物館
				西条市こどもの国　民具展示
	04.3.29			松山市埋蔵文化財センター
				松山考古館
				丹原町教委　民具保管庫
	04.3.30			川内町教委　民具保管庫
	04.3.31			愛媛県立歴史民俗資料館
				松前町教委　民具保管庫
		29	39	

２００４年度

山形	04.4.22	3	4	中山町立歴史民俗資料館
	04.4.23			山形市郷土館
				山形県立博物館
	04.4.24			新庄ふるさと歴史センター
				大石田町立歴史民俗資料館
	04.4.25			村山市農村文化保存伝承館
				河北町紅花資料館
				大江町歴史民俗資料館
				大江町小倉交流館
山形	04.5.6	3	4	山辺町ふるさと資料館
				山辺町玉虫湖畔荘　民具展示
				大石田町立歴史民俗資料館
	04.5.7			致道博物館
				松ヶ岡開墾記念館
	04.5.8			致道博物館　②
				松ヶ岡開墾記念館　②
	04.5.9			松ヶ岡開墾記念館　③
秋田	04.5.20	3	4	鹿角市花輪図書館民俗資料室
	04.5.21			花輪図書館民俗資料室　②
				渡部家史料館　蔵
				八幡平小学校　郷土資料室
				八幡平公民館　民具展示
				鹿角市先人顕彰館
	04.5.22			大館市立鳥潟会館　郷土資料庫
				大館市郷土博物館
				花輪図書館民俗資料室　③
	04.5.23			柳沢家　倉庫・蔵・井戸
				大湯ストーンサークル館
秋田	04.6.2	4	5	昭和町歴史民俗資料館
	04.6.3			秋田県立博物館
				秋田県博　旧奈良家住宅
	04.6.4			秋田県立博物館 ②
				秋田県博　旧奈良家住宅 ②
				若美町ふるさと資料館
	04.6.5			井川町歴史民俗資料館
				琴丘町立歴史民俗資料館
				二ツ井町歴史資料館
	04.6.6			仁賀保町勤労青少年ホーム
				斎藤宇一郎記念館
				旧佐々木家住宅
				天鷺村　佐々木家住宅
	04.6.16	4	5	秋田県立農業科学博物館
	04.6.17			中仙町長野公民館　民具収蔵庫
				田沢湖町郷土史料館

秋田	04.6.18			大曲市教育委員会
				大曲市民俗資料館(花館民俗資料館)
				千畑町郷土資料館
				秋田県埋文センター展示室
				払田柵跡
	04.6.19			協和町大盛館・収蔵庫
	04.6.20			雄物川町郷土資料館
				雄物川町立民家苑
				木戸五郎兵衛村
山形	04.8.6	8	9	山形県立うきたむ風土記の丘
				考古資料館
				農村文化研究所 置賜民俗資料館
宮城	04.8.7			七ヶ宿町水と歴史の館
山形				高畠町郷土資料館
				安久津神社
	04.8.8			米沢市上杉博物館
				夕鶴の里 資料館(南陽市)
				長井市古代の丘資料館
	04.8.9			米沢市教育委員会文化課
				米沢市埋蔵文化財資料室
				古志田東遺跡
秋田	04.8.10			羽後町歴史民俗資料館
				平鹿町農村文化伝承館
				十文字町十字館歴史資料展示室
				増田町ふれあいプラザ郷土資料館
	04.8.11			秋之宮博物館
				矢島町郷土資料館
				土田家住宅
	04.8.12			大内町教育委員会
				大内町 出羽伝習館
				大内町歴史民俗資料館
				民俗資料収蔵庫
山形	04.8.13			庄内米歴史資料館・山居倉庫
				酒田市立資料館
				城輪柵跡
				遊佐町教育委員会生涯学習課
				遊佐町教委 菅里収蔵庫
秋田				象潟町郷土資料館
	04.8.14			立川町歴史民俗資料館
				余目町資料館
福島	04.8.18	10	11	福島県立博物館
山形	04.8.19			夕鶴の里 資料館(南陽市) ②
				南陽市 民具収蔵庫
				熊野神社
				北野資料館 民具とくらし(南陽市)
				南陽市立結城豊太郎記念館
福島	04.8.20			奥会津地方歴史民俗資料館(田島町)
	04.8.21			野口英世記念館(猪苗代町)
				会津民俗館(猪苗代町)
	04.8.22			白河市歴史民俗資料館
				白河関跡・ふるさとの家移築民家
				石川町立歴史民俗資料館
	04.8.23			勿来の関跡
				いわき市勿来関文学歴史館
				いわき市暮らしの伝承郷
	04.8.24			須賀川市立博物館
				歴史民俗資料館
				天栄村公民館
				天栄村民具収蔵庫(旧公民館)
				天栄村ふるさと文化伝承館
				長沼町歴史民俗資料館
	04.8.25			双葉町歴史民俗資料館
岩手	04.8.26			北上市江釣子史跡センター
				北上市江釣子民俗資料館
				滝沢村教育委員会
				滝沢村 駿河家の蔵
				滝沢村教委 民具収蔵庫
	04.8.27			花巻市歴史民俗資料館
				石鳥谷町農業伝承館
	04.8.28			えさし郷土文化館
				藤原の郷
千葉	05.1.20	2	3	市立市川歴史博物館
				市立市川考古博物館
	05.1.21			八千代市立郷土博物館
	05.1.22			鎌ヶ谷市郷土資料館
				浦安市郷土博物館

山口	05.3.21	3	4	岩国学校教育資料館
				岩国市民具収蔵庫
	05.3.22			周東町 祖生公民館
				玖珂町社会教育課
				玖珂町民具収蔵庫
	05.3.23			本郷村教育委員会
				本郷村歴史民俗資料館
				美和町歴史民俗資料館
	05.3.24			光市文化センター
				岩国学校教育資料館 ②
		40	49	

２００５年度

静岡	05.4.14	1	2	韮山郷土史料館
				韮山歴史民俗資料館
				伊豆の国市教育委員会
				三島市郷土資料館
	05.4.15			藤枝市郷土博物館
				島田市博物館
				島田市博物館分館
長野	05.5.26	2	3	長野県立歴史館
	05.5.27			長野市立博物館
				長野県立歴史館 ②
	05.5.28			日本のあかり博物館
				小布施町歴史民俗資料館
				須坂市立博物館
				高山村歴史民俗資料館
長野	05.6.16	2	3	松本市立博物館
	05.6.17			塩尻市旧宗賀保育園収蔵庫
				豊科町郷土博物館
	05.6.18			松本市立博物館 ②
山口	05.6.23	1	2	光ふるさと郷土館
				平生町歴史民俗資料館
				平生町民具館
	05.6.24			周東町祖生民俗資料館
				由宇町歴史民俗資料館
				橘町民俗資料館
				久賀町歴史民俗資料館
長野	05.8.8	12	13	梓川村資料館
				梓川村教育委員会収蔵庫
				山形村ふるさと伝承館・郷倉
	05.8.9			山形村ふるさと伝承館 ②
				松本市安曇資料館
				大町市教育委員会収蔵庫
				穂高町郷土資料館
				堀金村歴史民俗資料館
	05.8.10			喬木村歴史民俗資料館
				豊丘村歴史民俗資料館
				高森町歴史民俗資料館
				駒ヶ根市郷土資料館
	05.8.11			麻績村立聖博物館
				むれ歴史ふれあい館
新潟	05.8.12			柏崎市立博物館
				旧鵜川小・山古志救出民具
				綾子舞会館
				柏崎市博・収蔵庫
				柏崎市博・展示室 ②
				上越市立総合博物館
	05.8.13			上越市立総合博物館 ②
				牧村歴史民俗資料館
				板倉郷土館
				新井市郷土資料館
	05.8.14			糸魚川市歴史民俗資料館
				フォッサマグナムージアム
				糸魚川市能生歴史民俗資料館
				松之山郷民俗資料館
	05.8.15			上越市史編纂室収集民具(直江津小)
				清里歴史民俗資料館
				安塚町歴史民俗資料館
				松代町郷土資料館
	05.8.16			長岡市立科学博物館
				見附市民俗文化資料館
				与板町歴史民俗資料館
	05.8.17			新潟市歴史博物館
				新発田市教委 民具収蔵庫

	05.8.18			村上地方民俗資料館
				村上堆朱工芸館
				村上市役所・生涯学習課
				村上市郷土資料館・民具収蔵庫
				縄文の里・朝日 奥三面歴史交流館
	05.8.19			亀田郷土資料館
				新潟県立歴史博物館
	05.8.20			十日町市博物館
				津南町歴史民俗資料館
富山	05.9.1	5	6	砺波郷土資料館
				砺波市　出町収蔵庫
				砺波市　般若民具室
	05.9.2			福岡町歴史民俗資料館
				高岡市立博物館
				高岡市農業センター
				清水一夫氏宅
	05.9.3			氷見市立博物館
	05.9.4			利賀民俗館
				平村郷土館
				相倉民俗館　１号館・２号館
				村上家
				五箇山民俗館
				塩硝の館
				井波歴史民俗資料館
				小矢部ふるさと博物館
	05.9.5			魚津市歴史民俗博物館
				富山県農業技術センター
	05.9.6			富山県教委文化財課収蔵庫
				魚津市歴史民俗博物館
富山	05.9.29	3	4	砺波郷土資料館 ②
				砺波市　出町収蔵庫 ②
	05.9.30			山田村歴史民俗資料館
				砺波市　出町収蔵庫 ②
	05.10.1			砺波市　般若民具室 ②
				新藤正夫氏宅
				砺波郷土資料館 ③
	05.10.2			宇奈月町歴史民俗資料館
				宇奈月農村文化伝承館山本家住宅
				滑川市立博物館
				滑川市東福寺野自然公園岩城家住宅
				立山町郷土資料館
富山	05.10.13	3	4	滑川市立博物館
				富山市民俗民芸村管理センター
				富山市民俗資料館
				富山県文化振興財団
				埋蔵文化財調査事務所
	05.10.14			福光町農林漁業資料館
				穴水町歴史民俗資料館
				穴水町教育委員会
				穴水町　由比ヶ丘児童館
石川	05.10.15			七尾城史資料館
				懐古館
				能登国分寺展示館
				能登国分寺跡
				羽咋市歴史民俗資料館
	05.10.16			鳥越一向一揆歴史館
				鳥越　農村文化伝承館
				白山市立鶴来博物館
				石川県立白山ろく民俗資料館
				一里野 温泉センター天領 民具展示
富山	05.10.20	3	4	新湊市博物館
				新湊市東明小旧給食センター収蔵庫
				加茂遺跡展示室
				下村民俗資料館
石川	05.10.21			羽咋市歴史民俗資料館 ②
				輪島市立歴史民俗資料館
	05.10.22			内灘町歴史民俗資料館 風と砂の館
富山				砺波郷土資料館 ④
	05.10.23			砺波郷土資料館 ⑤
				砺波市　出町収蔵庫 ④
石川				能美市立博物館
	06.3.8	3	4	名張市教育委員会文化振興室
				名張市郷土資料室
				名張市上長瀬収蔵庫
	06.3.9			青山分室
				高尾地区市民センター（旧高尾小）
三重				阿山 ふるさと資料館
				島ヶ原資料館（島ヶ原商工会）
	06.3.10			伊賀市教委生涯学習課文化財室
				伊賀市教委 旧上野民具収蔵庫
				伊賀町歴史資料館（柘植歴民）
				名張高校 郷土資料室収集民具
	06.3.11			松阪市立歴史民俗資料館
				明和町立歴史民俗資料館
				多気町郷土資料館
				斎宮歴史博物館
山口	06.3.15	4	5	和木町民俗資料館
				和木町教育委員会
				田布施町郷土館
	06.3.16			橘総合センター
				橘町民俗資料館
				周防大島教委大島教育支所
				大島歴史民俗資料館
	06.3.17			柳井市　しらかべ学遊館
				柳井市民具収蔵庫
				平生町歴史民俗資料館
				平生町民具収蔵庫
				平生町教育委員会
	06.3.18			周防大島文化交流センター
				旧東和町民具収蔵庫
	06.3.19			田布施町郷土館
三重	06.3.21	3	4	松阪市立歴史民俗資料館 ②
				松阪市 民具収蔵庫
				勢和ふるさと交流館
				大紀町郷土資料館
	06.3.22			四日市市立博物館
				多気町教育委員会
				多気町郷土資料館
	06.3.23			津市教育委員会文化財課
				多気町郷土資料館 ②
				大紀町郷土資料館
	06.3.24			ＪＡ三重中央郷土資料館
				美里ふるさと資料館
				芸濃郷土資料館
		42	54	

２００６年度

長野	06.6.1	3	4	軽井沢町歴史民俗資料館
				小林四郎氏宅　農作業復元画
	06.6.2			長野県立歴史館 ②
				長野県埋蔵文化財センター
	06.6.3			明科町歴史民俗資料館
	06.6.4			小諸市立郷土博物館
				上田市立博物館
				上田市立信濃国分寺資料館
山梨	06.6.15	3	4	山梨県立博物館
長野	06.6.16			尖石縄文考古館
				原村歴史民俗資料館
山梨				春日居町郷土館
	06.6.17			小淵沢郷土資料館
	06.6.18			甲府市民俗資料館
				春日居町郷土館
山梨	06.8.29	6	7	山梨県立博物館
	06.8.30			大月市郷土館
				富士吉田市歴史民俗博物館
長野	06.8.31			原村埋蔵文化財収蔵庫
				原村郷土館
				原村民俗資料展示室
山梨	06.9.1			南アルプス市教委文化財課
				甲西整理室
				安藤家住宅・蔵
				櫛形整理室
				八田整理室
静岡	2006.9.14	3	4	御殿場市民俗資料収蔵庫
	2006.9.15			裾野市立富士山資料館
				小山町フジボウ収蔵庫
	2006.9.16			沼津市歴史民俗資料館
				沼津市歴民 原収蔵庫
				土屋次義氏 農機具資料館
	2006.9.17			沼津市戸田造船郷土資料博物館
				沼津市ゆめとぴら舟山

愛知	06.10.19	0	1	愛知県農業総合試験場
		15	20	

図８ COE予算外　民具調査

２００３年度

県	調査日	泊	日	調　査　先
東京	03.11.14	0	1	足立区郷土博物館
埼玉				草加市立歴史民俗資料館
大阪	03.12.27	0	1	国立民族学博物館
奈良				奈良県立民俗博物館
		0	2	

２００４年度

群馬	04.4.16	1	2	吉井町郷土資料館
	04.4.17			群馬県立歴史博物館
香川	04.7.11	0	1	香川県歴史博物館
				飯山町郷土資料室
				綾南町ふるさと資料館
				香南町歴史民俗郷土館
山梨	04.8.1	3	4	韮崎市民俗資料館
				大泉村歴史民俗資料館
長野	04.8.2			高遠町教育委員会
				高遠町民俗資料館
				高遠城
				諏訪市観光課
				高島城
				諏訪市教育委員会
	04.8.3			諏訪市博物館
				諏訪大社上社本宮
				市立岡谷蚕糸博物館
				茅野市八ヶ岳総合博物館
				富士見町歴史民俗資料館
山梨	04.8.4			山梨県教委　博物館建設室
				豊富村郷土資料館
				中富町歴史民俗資料館
				早川町役場
				早川町郷土資料館
埼玉	05.1.14	1	2	草加市歴史民俗資料館②
				八潮市立資料館
	05.1.15			鳩ヶ谷市立郷土資料館
神奈川	05.2.3	0	1	横浜市歴史博物館
神奈川	05.2.10	0	1	横浜市歴史博物館
滋賀	05.2.23	0	1	滋賀県埋蔵文化財協会
神奈川	05.3.6	0	1	横浜市歴史博物館
神奈川	05.3.13	0	1	横浜市歴史博物館
神奈川	05.3.18	0	1	横浜市歴史博物館
		5	15	

２００５年度

神奈川	05.6.11	0	1	高橋栄治資料館
東京				町田市立博物館
兵庫	05.6.25	1	2	小野市好古館
				西脇市郷土資料館
				丹波市立春日郷土資料館
				丹波市立春日歴史民俗資料館
	05.6.26			那珂ふれあい館
長野	05.12.10	1	2	長野県立歴史館
				森将軍塚古墳館
	05.12.11			長野市立博物館
神奈川	06.2.17	0	1	横浜市歴史博物館
		2	6	

２００６年度

富山	06.5.11	2	3	砺波郷土資料館
	06.5.12			砺波郷土資料館
	06.5.13			砺波郷土資料館
岐阜	06.6.22	2	3	大垣市歴史民俗資料館
				輪中館
	06.6.23			徳山民俗資料収蔵庫
				藤橋村歴史民俗資料館
	06.6.24			徳山民俗資料収蔵庫
茨城	06.7.21	0	1	農林水産技術会議　筑波収蔵庫
和歌山	06.7.28	0	1	和歌山県埋文センター
	06.7.28			紀伊風土記の丘
神奈川	06.8.15	0	1	神奈川県歴博　野庭高校収蔵庫 ①
神奈川	06.8.17	0	1	川崎市市民ミュージアム
長野	06.9.4	0	1	富士見町落合小学校
神奈川	06.9.12	0	1	神奈川県立歴博野庭収蔵庫 ②
神奈川	06.9.18	0	1	神奈川県立歴博野庭収蔵庫 ③
東京	06.9.28	0	1	日野市、新選組のふるさと歴史館
				日野市、郷土資料館
長野	06.9.29	0	1	原村文化財収蔵庫
東京	06.10.7	0	1	豊島区郷土資料館
福島	06.11.11	2	3	只見町　旧朝日公民館民具収蔵庫
	06.11.13			昭和町　民俗資料館
静岡	07.2.12	0	1	御殿場市文化財講座　高根中郷館
		6	20	

２００７年度

群馬	07.6.7	0	1	渋川市北橘歴史資料館
				渋川市赤城歴史資料館
				渋川市教委文化財事務所
群馬	07.6.13	2	3	館林市教育委員会文化振興課
				館林市教委旧職業訓練校収蔵庫
	07.6.14			水上町歴史民俗資料館
				雲越家住宅資料館
				藤原の里ふるさと村資料館
	07.6.15			桐生市郷土資料展示ホール
				伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館
神奈川	07.7.6	0	1	神奈川県立歴史博物館
		2	5	

との交替がかなり進んでいる様子がうかがえた。これは日本海側が早く米どころ化していたこととの関連がうかがえる。その土摺臼は一般的な十字台に代わって円盤台のものも多く、木摺臼の文化の上に土摺臼を移植した様子がうかがえた。

特記すべきは抱持立犂と馬鍬である。抱持立犂は残存例が多いばかりではなく、地元の職人が抱持立犂をベースに短床犂化している類例をいくつも見つけることができた。東北地方では抱持立犂は近代短床犂出現までの露払いではなく、抱持立犂時代ともいうべき時代があったことをうかがわせる。また単橋鞍にドーナッツ型藁座布団、さらに内湾柱の馬鍬など、北九州ファッションの農具が広まっており、馬耕教師の登場が新時代の到来のイメージをともなって、あこがれをともなって受容されていた様子がうかがえる。

2005年度の調査　2005年度は、中部地方では静岡県・長野県・新潟県・富山県・石川県を調査した。中部地方は本州では一番南北幅の大きいところであり、その広さに比べて調査地点の少なさを痛感した。しかしながら先行研究も研究がなく、杳としてつか

めなかった中部地方の在来犂が長野県以北はほぼ直轅長床犂地帯であり、板へらをもつ混血型であることが確認できたことは大きい。このなかでは富山県が比較的密度高く回れた地域であり、そこで富山県を代表させて在来犂の各類型ごとに詳しい分析をおこなった結果、県内には6世紀に朝鮮系渡来人が入植し、その後7世紀に政府モデル犂の普及政策の波を被ったために混血型犂が生まれ、越中の在来犂の基本となったこと、その在来犂には朝鮮系要素の強いものと政府モデル犂要素の強いものがあり、そこからは6世紀の渡来以降に、犂耕が渡来人居留地から周辺の日本人集落に広がり始めていた可能性がうかがえた。これらの分析は本報告書論文「民具という非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査」のメインの部分を構成している。

また前年度末に山口県調査をしたことを受けて2度山口県周防地方の調査をした。これは「周防のウナグラ」(1)(2)(1990)[3]に結実した1989年の2度の調査の継承で、6世紀に朝鮮系渡来人の三角枠犂持ち込み、その上に7世紀の大化改新政府の長床犂導入・普及政策の波が被るという2つの層位関係の確認調査で、この想定は間違いないことと、新たに朝鮮系首木と鼻ぐり、政府モデル犂の鍛造V字形犂先の継承や一木犂へらの痕跡の発見など多くの成果を得て、河野「周防地方の民具から見た犂耕伝来の2つの波」(2006)[4]として発表した。

2006年度の調査　2006年度は基本的には調査予算なし、まとめ作業の年と位置づけられた年度であったが、若干の追加調査が認められ、なかでも山梨県を回ることができたことの意味は大きい。山梨県は2004年度の私費調査を受けて2度の調査をおこない、この地方が朝鮮系三角枠犂地帯であり、この犂には政府モデル犂との混血の要素は見られず、西日本の調査から帰納法で導き出した犂型から地域古代史を読み解く定理に当てはめれば、7世紀の百済・高句麗難民の持ち込みに相当する。ここでは朝鮮系三角枠犂が抱持立犂に比べて一回りも二回りも大型化しているが、これは人引き犂としての肩押しに対応するもので、その大型のまま馬耕犂として使われていることから、難民として入植したが当初は牛馬が手に入らず人が牛代わりに犂を引いてしのいだ。その後何世代か経ってから生活にゆとりができて馬を入手したが、すでに祖型は忘れられていて、ふたたび小型の畜力犂に回帰することはなかった、という7世紀の難民たちが近代のブラジル移民のような辛酸をなめつつも、それをくぐり抜けた子孫の系譜がやがて甲斐全体に広まったというドラマチックな歴史が民具の形態の細部にわたる分析から復原でき、「民具からの歴史学」の有効性を立証する結果となった。このことは、先の富山県在来犂の分析結果と合わせて本報告書論文「民具という非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査」のメインの部分となっている。

その他の成果　静岡県・長野県・新潟県・石川県・愛知県・三重県などについては、ここには興味深い資料は見つかっているが、朝鮮系三角枠犂密度が低く、まとまった成果にはなりがたかったので、本報告書には収められなかった。これらはいずれ神奈川大学経済学会紀要『商経論叢』や神奈川大学日本常民文化研究所の『民具マンスリー』等を通して、追々公表していくこととしたい。

結びにかえて
―地域の文化財担当者とのコラボレーションを目指して―

ニューズレター「調査概報」発行の試み　先にも述べたように、どの市町村にどんな収蔵施設があるか、収蔵庫・収蔵施設にどんな農具が収集されているかは行ってみないと分からず、また行った先でどれくらいの調査時間を要するかは、その資料の有り様に左右されるので、これも予想がつかず、そのため多くの場合は1施設の調査が終わった段階で次の施設に電話するか、あるいは飛び込みで事情を話してお願いするというアポなし調査となることもしばしばあった。にもかかわらずよく事情を分かっていただいて仕事中にも時間を割いて施設まで案内していただくなど、好意的なご協力をいただいたおかげで、1日に数カ所を駆け回るという調査が実現できたのである。こうした好意に応えるためになしうるのは、調査によって当面何が分かったのかについて、さし

あたりの成果を報告することであろう。そのためにはニューズレターを発行しよう、と2年度目から考えた。ただ張り切りすぎては続かない。そこでA4版1枚と枚数制限をし、2段組みであいさつ文と終わりの文は定型化して毎回同じとし、右肩にはエクセルで作成した日程表を貼り付ける。そして残りのスペースで調査内容・成果を報告する、という徹底した省エネ方式をとってスタートした。

発行してみると、これを増刷りして調査に携行し、新しく調査させてもらう際に何度かのニューズレターを渡してこんなことやってますので協力してください、と、具体的イメージで語れるという効果はあった。こうして何度か発行し何度か送付したが、やはりきびしいものがあった。とくに学期中の調査など、90分授業週9コマを月曜4コマ、火曜5コマと2日に圧縮し、水曜は会議日、木〜日曜まで3泊4日調査で、また月曜朝から授業が始まるというサイクルである。用事を押しのけて調査に出れば、帰れば仕事がたまっている。結局発行目指して途中で賞味期限が切れていった原稿がパソコンに残っていたり、印刷はしたものの送れずに終わったものも出る始末となった。それらのなかで発行できたものを、記録として末尾に掲載した。

文化財担当者との県別調査の夢　いま民具はかつてのように農家にはなく、市町村に収集され教育委員会などの管轄下、文化財担当者の管理のもとに置かれている。これらの民具は担当者の手で整理され公開され、将来はインターネット上で全国の民具が検索できるのが望ましいが、文化財担当者は多くの仕事を兼務していて、整理に手の着かない状況にある。考古学では県内の土器分布は自明のことであり、情報も研究者間で共有されている。それに比べて民具となれば、少数の研究者の頭のなかにはおおまかな分布図は描かれていようが、資料化されず共有財産になっていない。

今回駆け足の分布調査をおこないながら、県内の民具分布については、本来は地域研究者の得意技であろうと感じた。車社会の今日、県下の文化財担当者の有志が手分けして調査に当たれば、県内の民具分布図を作成することは、さほど困難なものではない。その分析作業に河野のような広域比較屋が加わって共同研究が実現するなら、かなりの精度で県域の5〜7世紀史が復原できる。これは民具の整理作業の弾みとなろうし、その人脈は地域の文化活動の核となるであろう。

よそ者の広域比較研究者と県下の文化財担当者とコラボレーションによる県下の民具の分布調査、いつか実現したいものである。

（こうの・みちあき）

【注】

(1)　川田順造「身体技法の技術的側面―予備的考察」（『西の風・東の風　文明論の組みかえのために』、河出書房新社、1992年）、川田「人類学の立場からの問題提起」（『非文字資料研究』 2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年）、川田「三角測量による文化比較」（『人類の地平から　生きること死ぬこと』、ウェッジ、2004年）。

(2)　河野通明「東北地方の引手なし馬鍬」（『民具マンスリー』37巻1号、神奈川大学日本常民文化研究所、2004年）

(3)　河野「周防のウナグラ（1）」（『民具マンスリー』、神奈川大学日本常民文化研究所、23巻2号、1990年）、「周防のウナグラ（2）」（『民具マンスリー』23巻3号、1990年）。

(4)　河野通明「周防地方の民具から見た犂耕伝来の2つの波」（『商経論叢』42巻2号、神奈川大学経済学会、2007年）

調査概報

COEプログラム2年めの2005年度から、1回ごとの調査結果を簡単なニューズレターにまとめてお世話になった調査先に送る活動をはじめた。継続を目指してスタートしたが、多忙さのなかで制作途中で終わったものもあれば、作っておきながら送れずじまいで賞味期限の切れたものもある。したがって調査ごとにすべて揃っているわけではないが、一応公表めざしたものであり、5年間の活動記録の資料として、末尾に掲げることにした。

このなかで、さしあたりの分析結果や見通しを公表してきたが、本報告書が東北地方の木摺臼調査と富山県・山梨県の在来犂調査に絞ったため、報告書に盛り込めなかったものも数多くある。これらについては今後資料の収集につとめ、神奈川大学経済学会紀要の『商経論叢』や、神奈川大学日本常民文化研究所の月刊誌『民具マンスリー』の誌上で、追々発表していくこととしたい。

なお播磨の調査は中町での講演に先だって実施したもので、COE外の調査である。見開き関係の調整のため、日付をさかのぼった位置に挿入した。

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

東北地方の民具の比較調査 概報 ― 山形県 04.4

2004. 4. 28／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

先日の調査の折りには、ご親切にしていただき、ありがとうございました。民具調査では予期しない発見で思わぬ時間がかかることが度々、そのため予定が組めず、突然のアポなし訪問となったことをご勘弁ください。

神奈川大学の非文字資料研究の一環

神奈川大学では、文部科学省の研究拠点形成計画の一環として「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

20 余年間民具を調査してきた私としては、民具こそ非文字資料の代表格と考えて、比較調査を進めています。

民具から地域の古代史が復原可能

『古事記』『日本書紀』には、中央の上層階級の政治・外交関係しか記録されておらず、地方の庶民の日常生活の歴史は文字資料からは見えません。ところが庶民の暮らしとともに歩んできた民具の形や呼称には、その土地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として継承されています。その遺伝情報を民具の比較調査で引き出し、各地の個性ある古代を復原してやろうというのが私の研究で、いま東北地方の民具調査を続けています。

青森・岩手・宮城調査から興味深い事実が

2003 年度は青森・岩手・宮城県を駆け足で回り、木摺臼の比較をしたところ、青森県・岩手北部は４本把手、岩手中部は２本把手、南部はクランク方式という分布が検出できました。４本把手・２本把手は立ち姿勢で、奈良・京都地方の座姿勢とは大違いです。東北の立ち姿勢は縄文系住民の作業姿勢を反映している可能性が高く、民具から古代の民族分布を復原できそうです。

県立博物館に臼目なしの木摺臼

今回は〔表〕のように、４日間で９ヵ所を回りました。

籾摺りに使った木摺臼は、上臼・下臼の接触面に放射状の臼目を切っていますが、県立博物館に展示された木摺臼には、何と臼目がなかったのです。これは大発見！

この理由は今後の調査に待ちましょう。

大石田町には２本把手型木摺臼

大石田町では、２本把手型木摺臼が確認できました。５月に詳しく調査する予定です。

1	4月22日	木	中山町立歴史民俗資料館
2	4月23日	金	山形市郷土館
3			山形県立博物館
4	4月24日	土	新庄ふるさと歴史センター
5			大石田町立歴史民俗資料館
6	4月25日	日	村山市農村文化保存伝承館
7			河北町紅花資料館
8			大江町歴史民俗資料館
9			小倉交流館

村山市には木摺臼クランクを付けた土摺臼

村山市では、土摺臼のやり木穴に手製の木製クランクを差しこんで往復回転で動かしていたという珍しい例が見つかりました。木摺臼の操作法に慣れきった人が土摺臼の全回転が使いにくくて改造したという、技術革新が地域に及んだときの波紋を示すもので、これも新発見。

中山町・県立博物館に引手なし馬鍬

東北地方ではかつて引手なし馬鍬が使われていた、これが昨年度調査での発見です。これは馬鍬が中国江南地方から導入された５世紀に、東北地方はまだ大和政権の支配圏外であったことを示すものとして注目されます。

今回も中山町・県立博物館に引手なし馬鍬があり、東北地方で広く使われていたことが確認できました。

大江町では引手を取付けた例、切り落とした例

大江町では使っていた引手なし馬鍬に素人細工で引手を付けた例や、購入品の馬鍬の引手をわざわざ切り落として引手なし馬鍬として使っていた例が見つかりました。技術革新が地域の人々に起こした波紋の多様さです。

民具は地域の歴史資料、地域おこしのかなめ

４日間の駆け足調査でしたが、地域の歴史がたくさん見えてきました。民具は個性的な地域の歴史を知る手掛かりであり、地域起こしの要（かなめ）となる資料です。この民具は地域住民の手で護られなければなりません。

研究者もまた、成果をかならず地域に返すという研究スタイルを確立しなければなりません。

民具が地域の歴史資料として認知される日をめざして、調査をつづける予定です。

今後ともよろしくお願いいたします。

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

東北地方の民具の比較調査 ― 山形県-2

2004.5.12／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

先日の調査の折りには、ご親切にしていただき、ありがとうございました。おかげで数々の新発見と出会うことができ、充実した４日間でした。

今回の調査先は左記の通りです。

神奈川大学の非文字資料研究の一環

神奈川大学では、文部科学省の研究拠点形成計画の一環として「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具調査歴 20 余年の私は、民具こそ非文字資料の代表格と考えて各地の民具の比較調査を進めています。

民具から地域の古代を復原する研究

『古事記』『日本書紀』などの文献史料には、地方の庶民生活は書かれていません。ところが庶民の暮らしとともにあった民具の形や呼称には、その土地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として保存されています。その遺伝子を比較調査で引き出し、地域ごとの個性ある古代を復原する研究で、今回は山形県調査の第２弾です。

木摺臼の作業姿勢に注目

土摺臼（どずるす）の出現以前は、稲の籾摺りには木摺臼（きずるす）が使われていました。その作業姿勢に注目しています。

2003 年度の木摺臼の比較調査の結果、青森県・岩手北部は４本把手、岩手中部は２本把手、岩手南部はクランク方式という分布が検出できました。４本把手・２本把手は立ち姿勢、クランク方式は腰掛け姿勢で、江戸時代に腰掛けとは新発見です。これらは都近辺の座姿勢とは大違いで、縄文系住民の作業姿勢を反映している可能性が高く、民具から古代の民族分布が復原できそうです。

大石田町に臼目をつぶした２本把手型

では山形県はどうなのか。大石田町で２本把手型がありました。ところでこの臼は臼目がを漆喰で埋めて使われていたことが確認できました。理由は不明ですが、山形県立博物館の臼目なし木摺臼との関連が注目されます。

鶴岡に縄引き方式とクランク方式

鶴岡では致道博物館に縄引方式、松ヶ岡開墾記念館ではクランク方式が確認できました。これで、山形県には２本把手・縄引き・クランクの３方式が並存していたことになり、今後の調査に期待がかかります。

1	5月6日	木	山辺町ふるさと資料館
2			玉虫湖畔荘
3			大石田町立歴史民俗資料館
4	5月7日	金	致道博物館
5			松ヶ岡開墾記念館
6	5月8日	土	致道博物館 ②
7			松ヶ岡開墾記念館 ②
8	5月9日	日	松ヶ岡開墾記念館 ③

東北地方の歴史を語る引手なし馬鍬

昨年度、岩手県・青森県で引手なし馬鍬が数例見つかりました。これは東北地方の人が他地方の馬鍬を見よう見まねで再現製作したときに、引手を見落としたためと考えられ、馬鍬が中国から導入された５世紀に、東北地方は大和政権の支配圏外だったことを物語っています。

これは文献史料にもとづく日本史の研究成果ともよく一致し、民具からの古代史の復原が、信頼度の高いものであることを示しています。

山辺町に引手なし馬鍬

今回は山辺町の玉虫湖畔荘で引手なし馬鍬を見つけました。ひどく煤けていて、使われていたのはかなり昔であったと考えられます。

松ヶ岡に88台の馬鍬、縄添え方式を発見

松ヶ岡開墾記念館の庄内米づくり用具収蔵庫の棚には 88 台の馬鍬がズラリ、３日がかりで調査しました。

引手なし馬鍬はありませんでしたが、引綱を台木に括りつけ、引手に添わせて先端に出すという縄添え方式が 88 台中 20 台もありました。これは手作りで引手を付けたことに始まると考えられるもので、この地方独自の方式として注目されます。

明治５年の農具図絵に引手なし馬鍬

致道博物館では、明治５年の田川郡の農具図絵に引手なし馬鍬が確認できました。明治初年ではまだ引手なし馬鍬が使われていたことになり、引手付き馬鍬は九州の馬耕教師が持ち込んだとの推定を裏付けるものです。

引きつづき山形・秋田・福島県を調査

調査をすれば新発見！これが民具の世界。今後、秋田・福島県に広げて調査を続けますので、よろしく。

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

東北地方の民具の比較調査 ― 秋田県-1

2004.5.26／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

先日の調査の折りにはご親切にしていただき、ありがとうございました。今回は同僚の大里浩秋氏の故郷の鹿角市・大館市の調査。岩尾昌子氏には事前にお手配いただいた上、21 日は秋元信夫氏、22 日は古澤三樹夫氏、23 日は岩尾氏の車で解説付きで案内していただいたので、短期間で密度の高い調査ができました。行く先々でも多くの方々にお世話になり、深く感謝しております。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では、文部科学省の研究拠点形成事業の一環として「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。大里氏も河野も、この研究グループに属しています。

民具から地域ごとの庶民の歴史を解明

『古事記』『日本書紀』などの文献史料には、地方の庶民生活は書かれていません。ところが庶民の暮らしとともにあった民具の形や呼称には、その土地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として保存されています。その遺伝子を比較調査で引き出し、地域ごとの個性ある歴史を復原する研究で、今回は秋田県調査の第1回です。

木摺臼は発見できず

土摺臼（どずるす）の伝来以前、籾摺りには木摺臼（きずるす）が使われていました。木摺臼を把手を握って立って動かすのか、お尻を地面につけて縄を引くのか、形と作業姿勢の違いは、伝播経路や使い手の民族系譜をさぐる手掛かりになると注目していますが、残念ながら木摺臼には出会えませんでした。この地では土摺臼との交代が早かったようです。

花輪図書館民俗資料室に九州型農耕鞍

花輪では単橋鞍にドーナツ形藁座布団を敷いた九州型の農耕鞍が見つかりました。明治 20 年代に北九州の馬耕教師が犂の普及のためにこの地に来ていたことの痕跡で、こんなに純粋な九州型は東北調査で初めてです。

鹿角・大館では飾り金具のない荷鞍

馬の背で荷物を運ぶ荷鞍は、後枠が直立し飾り金具付きのタイプが一般的ですが、後枠が傾斜したタイプや、飾り金具のないタイプが東北地方では混在しています。その分布図をつくれば、東北地方の中世～近世の歴史が見えてきそうで期待しています。ではこの地ではどうか。

1	5月20日	木	鹿角市花輪図書館民俗資料室
2	5月21日	金	花輪図書館民俗資料室 ②
3			渡部家史料館　蔵
4			八幡平小学校　郷土資料室
5			八幡平公民館
6			鹿角市先人顕彰館
7			柏館跡（新毛馬内城・桜庭城）
8	5月22日	土	大館市立鳥潟会館　郷土資料庫
9			大館市郷土博物館
10			花輪図書館民俗資料室 ③
11	5月23日	日	柳沢家　倉庫・蔵・井戸
12			大湯ストーンサークル館

花輪図書館民俗資料室、鳥潟会館、大館市郷土博物館では後枠直立・飾り金具なしのタイプが確認できました。

渡部家で引手なし馬鍬

昨年、岩手・青森県で引手なし馬鍬を見つけました。これは馬鍬が中国から導入された5世紀に東北地方は大和政権の支配圏外だったことを物語る資料です。では秋田県はどうか。石鳥谷の渡部家の蔵では、把手が壊れ煤けた引手なし馬鍬を発見、よくぞ捨てずに残してくださった。江戸時代タイプの貴重な資料です。

柳沢家に右反転の洋式プラウ

犂で土を耕起するとき、進行方向の右に土を返すのを右反転、左に返すのを左反転といいます。中国は右反転で朝鮮半島は左反転、日本は左反転で朝鮮系。ところが欧米は右反転で、明治以降に右反転の洋式プラウが導入され、北海道や東北地方の一部で使われました。

柳沢家の蔵では、この洋式プラウを発見、何代か前のご当主の進取の気風と経済的豊かさを物語る資料です。

田植えは女、こだわりは少ない

田植えをするのは女か男か、各地でまちまちです。これは稲作の系譜やその地の人々の民族系譜をさぐる手掛かりとして注目しています。工藤正広氏によれば田植えは女が中心だが手のすいたときには男も手伝うとのこと。花輪図書館民俗資料室の解説パネルでも女でした。

10月まで秋田・山形・福島県の概況調査

今年度は年報原稿の締切が 11 月。鹿角・大館はおかげで概観できましたので、秋田の他地方や山形・福島県を駆け足で回って、東北地方の概況をまとめる予定です。

神奈川大学ＣＯＥプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

東北地方の民具の比較調査 ― 秋田県-2

2004. 6. 10／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

先日の調査の折りにはご親切にしていただき、ありがとうございました。おかげ様で数々の新発見と出会うことができ、充実した５日間となりました。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では文部科学省の研究拠点形成事業の指定を受けて「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具調査歴 24 年の私は、民具こそ“非文字資料”の代表格と考えて、各地の民具の比較調査を進めています。

民具から地域ごとの庶民の歴史を解明

『古事記』『日本書紀』などの文献史料には、地方の庶民生活は書かれていません。ところが庶民の暮らしとともにあった民具の形や呼称には、その土地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として保存されています。その遺伝子を比較調査で引き出し、地域ごとの個性ある歴史を復原する研究で、今回は秋田県の第２回調査です。

木摺臼は発見できず

土摺臼（どずるす）の伝来以前、籾摺りには木摺臼（きずるす）が使われました。この木摺臼の形と作業姿勢の違いは、伝播経路や使い手の民族系譜を探る手掛かりと注目していますが、今回も木摺臼はなく、土摺臼への交代が早かったようです。

県博・若美町に福岡型のドーナツ座単橋鞍

県立博物館と若美町でドーナツ形藁座布団をつけた農耕鞍がありました。鞍の構造は後枠の頂部が開いた単橋鞍、単橋鞍とドーナツ座布団の組合せなら福岡県型です。県博の１台は峰浜村、昭和町にも単橋鞍が２台。

これらは明治時代に福岡県の馬耕教師が来たことの証拠で、たとえ記録が無くても民具には痕跡が残るのです。

仁賀保町・若美町に抱持立犂

仁賀保町では明治 30 年に庄内の本間農場から馬耕教師を招聘したとのこと。この地の乾田馬耕の普及を進めた斎藤宇一郎記念館には抱持立犂（かかえもったてすき）が展示されていて名前も「抱かえ犂」、若美町には改良型がありました。

実物に即した抱持立犂の研究が必要

この抱持立犂にもいくつかのタイプがあり、おそらく馬耕教師の出身地の違いと考えられますが、その研究がないのです。この形の違いを掌握すれば、文字記録が無くても民具から馬耕教師が何県のどこから来たのか特定できるはずです。またまた課題が増えました。

1	6月2日	水	昭和町歴史民俗資料館
2	6月3日	木	秋田県立博物館 ①
3			秋田県立博物館 旧奈良家住宅 ①
4	6月4日	金	秋田県立博物館 ②
5			秋田県立博物館 旧奈良家住宅 ②
6			若美町ふるさと資料館
7	6月5日	土	井川町歴史民俗資料館
8			琴丘町立歴史民俗資料館
9			二ツ井町歴史資料館
10	6月6日	日	仁賀保町勤労青少年ホーム 斎藤宇一郎記念館
11			仁賀保町 旧佐々木家住宅
12			天鷺村（岩城町） 佐々木家住宅

秋田県の荷鞍は後枠直立型

青森・岩手県では後枠直立型と後枠傾斜型が混在していますが、秋田県はどうやら後枠直立型。また飾り金具は無いものとあるものが混在しています。この荷鞍の東北全域の分布図をつくれば、東北地方の中世～近世、そして県ごとの違いや藩政との関係が見えてきそうです。

昭和町、県博、井川町に手作り引手の縄添え馬鍬

昨年来の調査で、江戸時代の東北地方では引手なし馬鍬が使われていたことが明らかになりました。その引手なし馬鍬に手作りで引手を付けたタイプが昭和町、県博（秋田市収集）、井川町で見つかりました。県博と井川町のは歯も鉄ではなく木製で、明治中期のものでしょう。

昭和町、若美町の鉄棒左鈎馬鍬は津軽系

馬鍬の鉄棒引手は外側に曲げるのが普通ですが、昨年の調査で青森県津軽地方では左右とも左に曲げたタイプが使われていました。今回は昭和町・若美町では同タイプが見つかり、北前船でのつながりが感じられてます。

岩城町・奈良家住宅に関東型馬鍬

岩城町と奈良家住宅に関東型馬鍬。後者は田沢湖町収集で、２台とも小振りで古いものです。

琴丘町・奈良家住宅には一木造りの鍬

琴丘町では柄と平が一木造りの鍬が多数、奈良家住宅にも１本。これは縄文系の技術として注目されます。

次回は大曲市を拠点に調査

調査をすれば新発見、これが民具の世界。これからも秋田県調査を続けますので、よろしくお願いいたします。

神奈川大学ＣＯＥプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

東北地方の民具の比較調査 ― 秋田県-3

2004.6.22／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

先日の調査の折りにはご親切にしていただき、ありがとうございました。お陰様で発見、発見の毎日でした。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では文部科学省の研究拠点形成事業の指定を受けて「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具から、文字記録に残らない庶民の歴史を復原

庶民の暮らしとともにあった民具の形や呼称には、その地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として保存されています。その遺伝子を比較調査で引き出すなら、文字に記録されなかった歴史の復原ができます。今回は民具から秋田県の庶民の歴史をさぐる調査の第３回です。

内陸部には双用犂が少ない？

馬耕犂（ばこうすき）には、耕すときに土を左側に返す単用犂（たんようすき）と、レバー操作で左にも右にも返せる双用犂（そうようすき）があります。山形県鶴岡近郊の松ヶ丘開墾記念館ではほとんどが双用犂、今回の調査ではほとんどが単用犂です。

明治 20 年代に福岡県の馬耕教師が沿岸部に伝えた抱持立犂（かかえもったてすき）は、舵棒の持ち替えで左右どちらにも返せました。ここから双用犂地帯はこの抱持立犂が定着していた地域、単用犂地帯は左反転短床犂が出てから馬耕が普及した地域との解釈も可能です。残された民具からその地の歴史を復原する……これが民具研究の醍醐味です。

協和町に後面把手つき抱持立犂

協和町に犂身の後面に小把手の付いた抱持立犂がありました。これは仁賀保町で見たのとは別系統。同じ福岡県でも郡が違うためと考えられ、今後の研究課題です。

千畑町・田沢湖町に別材犂床の抱持立犂

田沢湖町・千畑町で、抱持立犂タイプながら別材の犂床を付けた犂があり、前者には「特許」、後者には「羽後角間川鎌田工場」の焼印。千畑町郷土資料館の安部雄太郎氏によれば、大曲市角間川の鎌田農機の前身とのこと。同型のものは農業科学博物館にもありました。

どこにも福岡タイプのドーナツ座単橋鞍

後枠の頂部の開いた単橋鞍は、九州・山陰地方の形。それにドーナツ形の藁座布団を組み合わせれば、福岡型。今回もドーナツ座の単橋鞍がどこでも見られ、明治時代に福岡県の馬耕教師が各地で歓迎されていた様子がうかがえます。民具からは、受け手の反応が見えるのです。

1	6月16日	水	秋田県立農業科学博物館
2	6月17日	木	中仙町　長野公民館
3			田沢湖町郷土史料館
4	6月18日	金	大曲市民俗資料館（花館民俗資料館）
5			千畑町郷土資料館
6			秋田県立埋蔵文化財センター展示室
7			払田柵跡
8	6月19日	土	協和町大盛館
9	6月20日	日	雄物川町郷土資料館　木戸五郎兵衛村

関東型馬鍬は、平安時代に持ち込みか

東北地方の馬鍬は北九州の影響を強く受けていますが、たまに関東型馬鍬が混在しており、今回も田沢湖町・千畑町・協和町・雄物川町で確認できました。

古代国家は払田柵のような城柵を築くと、中部・関東地方から農民を送り込み防衛に当たらせており、払田柵周辺の関東型馬鍬は、この時に持ち込まれた可能性が出てきました。だとすれば、東北地方の引手なし馬鍬のモデルは、東北地方内部の関東型馬鍬となり、俄然、現実味が出てきました。今後の調査に期待がかかります。

雄物川町に手回し龍骨車

雄物川町の展示室に木製チェーンでつないだ堰板（せきいた）で樋（とい）の水を掻き揚げる龍骨車（りゅうこっしゃ）。淺舞町（平鹿）の鶴田農具製作所製で、県立博物館の収蔵庫にも駆動棒つきの完形品があります。龍骨車は二千年前に中国で発明されたもので、これも中国モデルのコピー商品。大正・昭和期に中国モデルをもとに製作されたと考えられます。

雄物川町の移築民家で秋田の木摺臼に初見参

これまでの３回の秋田調査で木摺臼（きずるす）には一度も出会えず、あきらめかけていたところ、最終日に感激の対面、形式は岩手南部や山形県で見かけたクランク方式でした。

木摺臼が少ないのは早くに土摺臼（どずるす）に交代したためで、秋田地方は、江戸時代に早くも米作地として特化していたことを物語っています。

大曲・千畑・田沢湖・雄物川で円座の土摺臼

土摺臼の台座は角材を十字に組むのが一般的ですが、これは大木を輪切りにした丸い台座。円座はこの地独特で、江戸時代の文化圏・流通圏を知る手掛かりです。

播磨の在来犂の比較調査

2005.6.30／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

6/26の“中町おもしろ考古学セミナー”での講演に先立って、宮原文隆氏の案内で、25日は小野・西脇・丹波市の資料館、26日は中町の犂を見せてもらいました。

突然の調査にもかかわらず、ご親切ありがとうございました。調査で何が分かったか、とりあえずの報告です。

見えてきた播磨型

民具から古代史の情報を引き出すには、広域調査が必要。目指すは日本列島全域調査、播磨はその一環です。

播磨はほとんど未調査、今回が第一歩です。小野市・西脇市・中町で長床犂があり、それらには細幅の犂床で、先端の細幅のままではしゃもじ形には成形しない。また犂柄は直棒で高いという共通の特徴が見られます。

近畿の在来犂は大和型・河内型・摂津型と３分できますが、これらとは異なる「播磨型」が見えてきました。

近代短床犂と並行使用か

西脇には在来犂用の犂先や犂へらに替えて、近代短床犂用の犂先・犂へらを付けた例が見られますが、中町の２点は、初めから近代短床犂用の先とへらを付けており、へら受けの三角添板も当初から付いています。

これは大阪平野と同様に、近代短床犂が普及してからも長床犂が使い続けられていたことの証拠と考えられます。聞取りによる裏付けがほしいところです。

春日では12年ぶりに抱持立犂に再会

春日郷土資料館には、犂轅の折れた抱持立犂があります。これは明治時代に福岡県の馬耕教師が「乾田馬耕」の普及に全国を回って広めたもので、この地域にも馬耕教師がたしかに来ていたことの証拠です。

1993年、梶原遺跡出土犂を見に来た折りに、この地の近代史の資料として貴重ですよといったのが地域版の新聞に紹介されたことがあり、12年ぶりの再会でした。

この抱持立犂の犂先と把手先端をむすんだ弦長は104㎝、一般には120㎝前後なのに比べて、やや小振りです。

圧巻は、２台の中世出土犂

今回の圧巻は、２台の中世出土犂に出会ったこと。これまで古代史～中世の出土犂は、２年に１台程度の発見だったことからすれば、これは驚天動地の出来事です。

藤田・門ノ坪遺跡出土犂（社町：中世）

犂床と犂柄は一木造りで、床長約85㎝。犂柄は60㎝ほど残存し左右方向の枘穴部分で折損。これを右に突き出て小把手のものと解すると、犂轅の枘穴はさらに高い位置になり、犂轅は下降直轅となる。とすれば朝鮮系無床犂と政府モデル長床犂の混血型でしょう。

また犂柱枘穴に接して後傾した枘穴があり、材の根が残っていて右側面からの栓で固定されている。犂柱前方となれば犂へらの位置で、団扇形の木製犂へらが取り付けられていた可能性がある。一木犂へらは木取りが大変なので、別材で対応したものでしょうか。材はケヤキ？

鴨谷遺跡出土犂（加西市：鎌倉時代）

これも犂床と犂柄は一木造りで、床長約89㎝。犂柄は90㎝ほど残存。これは荒加工の未成品。材はマツ？

犂製作者の聞取りでは、犂にいい木を見つけると、冬に切って持ち帰り、ツシに上げて乾燥させておいて、注文がくれば成形するのだという。福岡県の辻田西遺跡にも鎌倉時代の一木犂柄の未成品の長床犂が出ていました。

一木犂柄は、安坂・城の堀出土犂と共通

注目されるのは２例とも犂床と犂柄が一木造りであることで、安坂・城の堀遺跡出土犂と共通し、７世紀の技法が中世まで継承されていたことになります。

藤田・門ノ坪遺跡犂の細幅犂床は、在来犂に継承

藤田・門ノ坪遺跡犂の犂床の幅は、後端で5.4㎝、中程で5.9㎝の細幅タイプ。これは播磨型在来犂に通じる。

播磨では、犂床は中世ですでに長かった

７世紀長床犂は犂先を嵌めれば75㎝前後であるのに比べて、民具の在来犂は90㎝前後。ところが中国の在来犂は出土犂と同サイズで、日本だけがその後に大きくなったことになる。それはいつか？　その原因は？

今回の出土犂は、藤田・門ノ坪遺跡犂の犂床長は85㎝、鴨谷遺跡犂は89㎝。これに犂先を嵌めるので、実際には90㎝前後となり、播磨型在来犂の80～90㎝台につながり、播磨では中世ですでに長かったことが確認できました。ではいつ長くなったのか、その原因は？

犂は地域の古代・中世を語る資料

これらは民具の歴史資料としての重要性を示すものです。播磨の在来犂調査が進んだ段階で、また考古学・文化財の皆さんと摺り合わせの機会を持ちたいものです。

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

東北地方の在来農具の比較調査 ― 山形・秋田・福島・宮城・岩手　04.8

2004.9.30／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

９月も末を迎えて、ようやく朝夕秋らしくなってきた横浜です。皆さんのところはいかがでしょうか。

さて先日の調査の折りにはご親切にしていただき、ありがとうございました。大阪生まれで東北知らずのわたしには行く先行く先が初めての地、おかげで数々の新発見と出会うことができ、充実した毎日でした。

調査のあとはデータの整理に追われる毎日

８月は１日～４日にゼミナール合宿の下見を兼ねて山梨・諏訪湖方面調査、そのあと今回の東北調査がのべ 20 日間で８月は終わり。９月に入ってゼミ合宿の本番７日間、そのうち後期授業が始まって準備に追われる毎日で、９月も終わりました。

今回の東北調査は延べ 20 日間、一気にたくさんの資料館を見せてもらったので、どこで何を見てきたのか混線する始末、そこで写真とフィールドノートをつきあわせながら、資料館ごとに見てきた事柄一覧を作ることから始めていて、お知らせが遅くなりました。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では昨年度より文部科学省の研究拠点形成事業の指定を受けて、５年間の「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具調査歴 24 年の私は、民具という“非文字資料”から文字記録に残らなかった各地の庶民レベルの歴史を古代から近代まで体系的に復原するのがテーマです。

大正・昭和の民具から古代・中世の歴史情報を引き出すには広域の比較調査が必要、理想的には日本列島全域調査ですが、その手始めに東北地方からというわけです。

今回の調査で得たデータは膨大ですが、そのなかからまとまって見えてきたことは以下の通りです。

１．木摺臼（きずるす）

東北地方の木摺臼は４タイプ

籾から籾殻をはずして米粒を取り出す籾摺（もみす）りには、古代からは木製の木摺臼が使われ、戦国時代末期に中国から土摺臼（どずるす）が伝わって江戸時代に広まりました。

昨年度の調査で、東北地方の木摺臼には４本把手型、２本把手型、クランク方式、縄引き型の４タイプがあり、北から南にきれいに分布していることが確認できました。

滝沢は４本把手、花巻・石鳥谷・北上は２本把手型

今回の調査で岩手の滝沢村は青森にも見られる４本把手型、すこし南の花巻市・石鳥谷町・北上市では２本把手型でした。また花巻の展示室の木摺臼は２本把手型を素人細工でクランク方式に改造した珍しいものです。

福島県と置賜には縄引き型

福島県では田島町・猪苗代町で縄引き型、県博にも２台、今年３月の調査では、金山町でもこのタイプを確認しています。また山形県南部の置賜民俗資料館でも縄引き型が確認できました。

縄引き型は大化改新政府が広めたか

今回の調査で、福島県以南の木摺臼はほぼ縄引き型という分布が見えてきました。縄引き型の下限は枕草子の 10 世紀、それ以前に同タイプの木摺臼が全国的に分布しているとなれば、７世紀に大化改新政府によって全国に広められた可能性が出てきました。蝦夷の世界にはその後に伝わったので様々なバラエティーが生まれたと考えると辻褄が合います。民具の形からその地域の古代史が復原できるわけで、今後の調査に期待がかかります。

２．馬鍬

七ヶ宿・石川町で引手なし馬鍬

昨年度の調査で岩手県の二戸市で引手のない馬鍬を見つけて以来注目していますが、今回の調査では宮城県七ヶ宿町、福島県石川町で発見、いずれも既製品の引手をわざわざ抜き取って台木に直接縄を括りつけて使っていたものでした。

これは引手なしで慣れてしまった中年以上の人の対応と考えられ、伝統社会に新技術が入ってきた場合の受け

〔04年度-6〕 山形・宮城・秋田　2004.8.6～8.14　8泊9日

No.	調査日		県	調査先　館名	泊
1	8.6	金	山形	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館	米沢
2				農村文化研究所　置賜民俗資料館	
3	8.7	土	宮城	七ヶ宿町水と歴史の館	
4			山形	高畠町郷土資料館	
5				安久津八幡社	
6	8.8	日		米沢市上杉博物館	
7				夕鶴の里　資料館(南陽市)	
8				長井市古代の丘資料館	
9	8.9	月		米沢市教育委員会文化課	湯沢
10				米沢市埋蔵文化財資料室	
11				古志田東遺跡	
12	8.10	火	秋田	羽後町歴史民俗資料館	
13				平鹿町農村文化伝承館	
14				十文字町十字館　歴史資料展示室	
15				増田町ふれあいプラザ　郷土資料館	
16	8.11	水		秋之宮博物館(雄勝町)	
17				矢島町郷土資料館	
18				土田家住宅(矢島町)	
19	8.12	木		大内町教育委員会	酒田
20				大内町 出羽伝習館	
21				大内町歴史民俗資料館 収蔵庫	
22	8.13	金	山形	庄内米歴史資料館・山居倉庫	
23				酒田市立資料館	
24				城輪柵跡	
25				遊佐町教育委員会生涯学習課	
26				遊佐町教委　菅里収蔵庫	
27			秋田	象潟町郷土資料館	
28			山形	日和山公園	
29	8.14	土		立川町歴史民俗資料館	帰途
30				余目町資料館	

〔04年度-7〕 福島・山形・岩手　2004.8.18～8.28　10泊11日

No.	調査日		県	調査先　館名	泊
1	8.18	水	福島	福島県立博物館	会津若松
2	8.19	木	山形	夕鶴の里	
3				南陽市 民具収蔵庫	
4				熊野神社	
5				北野資料館　民具とくらし(南陽市)	
6				南陽市立結城豊太郎記念館	
7	8.20	金	福島	奥会津地方歴史民俗資料館(田島町)	
8	8.21	土		野口英世記念館(猪苗代町)	郡山
9				会津民俗館(猪苗代町)	
10	8.22	日		白河市歴史民俗資料館(臨時休館)	
11				白河関跡・ふるさとの家移築民家	
12				石川町立歴史民俗資料館	
13	8.23	月		勿来の関跡	
14				いわき市勿来関文学歴史館	
15				いわき市暮らしの伝承郷	
16	8.24	火		須賀川市立博物館・歴史民俗資料館	
17				天栄村公民館	
18				天栄村　民具収蔵庫(旧公民館2F)	
19				天栄村ふるさと文化伝承館	
20				長沼町歴史民俗資料館	
21	8.25	水		双葉町歴史民俗資料館	北上
22	8.26	木	岩手	北上市江釣子史跡センター	
23				北上市江釣子民俗資料館	
24				滝沢村教育委員会	
25				滝沢村　駿河家の蔵	
26				滝沢村教育委員会　民具収蔵庫	
27	8.27	金		花巻市歴史民俗資料館	
28				石鳥谷町農業伝承館	
29	8.28	土		聖塚(河野通信の墓)	帰途
30				えさし郷土文化館	
31				藤原の郷(江刺市)	

止め側の葛藤の事例として注目されます。

増田町の絵馬にも引手なし馬鍬

秋田県増田町の資料館には月山堂絵馬のレプリカが展示されており、その中に引手なし馬鍬が描かれていました。ただ一般に絵師は農具に関心が薄く、いい加減に描いたり手本を丸写しすることも多いので注意を要しますが、この月山堂絵馬は信頼度が高いと見られます。

遊佐町には縄添え引手の馬鍬

また山形県の遊佐町では引手があるにもかかわらず、わざわざ台木に縄を掛け引手に沿わせてたタイプが多く見られました。本年５月の調査で羽黒町の松ヶ岡開墾記念館にもあったもので、引手なし馬鍬の伝統がいかに強かったかを示すものとして注目しています。

股木引手・板鈎引手の馬鍬

他方、馬鍬の引手に枝分かれした股木の鈎を用いたものを「股木引手馬鍬」、これが様式化して板から鈎を刳りぬいたタイプを「板鈎引手馬鍬」と呼ぶことにしていますが、これらのタイプは関東地方に多く見られ、８月初旬に調査した山梨県は板鈎引手でした。

今回の調査で股木引手馬鍬が福島県田島町、岩手県北上市、花巻市、滝沢村駿河家で、また板鈎引手の古いタイプは北上市、花巻市、石鳥谷町で見つかりました。

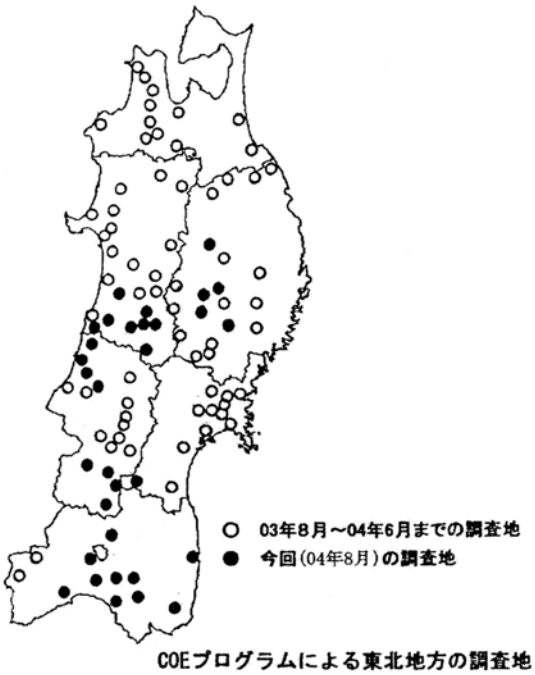
馬鍬の引手は東北古代史を解く重要なカギ

東北各地に見られる引手なし馬鍬やその痕跡は、馬鍬が中国から導入された５世紀代にこの地が大和政権の支配圏外であったことを示すものです。このことは文献史料にもとづく東北史の常識とうまく重なり、民具から古代史にさかのぼる研究が有効であることを示しています。

そのなかで関東・中部地方系の股木引手やその後裔の板鈎引手が点々と混在するのが東北地方の現状です。

股木引手は柵戸の持ち込みか

７～９世紀、律令国家は蝦夷を攻略して城柵を築いた



COEプログラムによる東北地方の調査地

際、防衛のために関東・中部地方の農民を柵戸(きのへ)として移住させましたが、彼らは故郷から農具を持ち込んでいるはずで、股木引手や板鈎引手はその折りに持ち込まれた可能性が考えられます。今回股木引手が見つかった滝沢村の駿河家には、先祖は駿河から移住してきたという伝承が残っているそうで、俄然現実味をおびてきました。

来歴不明の下面突起引手

木製引手の下面に短い棒の突起をつけて縄掛けとするのは東北地方独特のタイプ。今回は山形県米沢市・置賜資料館・高畠町・南陽市・北野資料館それに岩手県江刺市で見つけて注目していますが、全国的にも珍しいこのタイプがいつ、どこで、どんな事情で生まれたのか、その来歴はなお不明です。

３．鞍

代掻き鞍を「荷鞍」とよぶ習慣

福島県田島町・白河市、岩手県花巻市では馬に馬鍬を引かせる鞍を「荷鞍」と呼んだようです。これは昨年度の調査でも何例か見ていますが、これは農耕鞍より先に荷鞍が使われていたことの痕跡で、言いかえれば馬鍬の伝来が遅かったことの証拠とも見られ、注目しています。

４．抱持立犂にも多様な形

各地に残る抱持立犂

明治 20 年代を中心に北九州の馬耕教師が「乾田馬耕」をスローガンに全国各地を回って技術指導をおこなったことが知られていますが、それをもっとも素直に受け止めたのが東北地方、馬鍬で代掻きはしても耕起は鍬で人力に頼っていたため、大歓迎されたのでしょう。このとき持ち込まれたのが抱持立犂(かかえもったてすき)という無床犂です。

今回も秋田県平鹿町、矢島町、矢島の土田家、大内町、山形県の置賜資料館、高畠町、南陽市、南陽の北野資料館、遊佐町、余目町、岩手県の花巻市、福島県博、会津民俗館、天栄村、いわき市、双葉町で確認できました。

抱持立犂にも多様なタイプ

一口に抱持立犂といっても後面把手のあるものないもの、水平梶棒か斜め梶棒か、無床犂か当初から短床犂かなどなど、様々なバラエティーがあることが昨年来の調査で分かってきました。これは馬耕教師の出身地や系譜をたどる手がかりとなるはずで、注目しています。

さらに抱持立犂を地元で改良を加えたタイプも多く見られましたし、近代短床犂も左右に反転可能な双用犂が大部分を占めるのも水平梶棒型の抱持立犂が前提にあったからでしょう。

ドーナツ型藁座布団の千木枠単橋鞍

犂を引かせる鞍では、九州系の千木枠単橋鞍が秋田県羽後町、大内町、矢島町、岩手県花巻市、福島県博にありました。また羽後町、大内町、矢島町では鞍の下に敷く藁座布団がドーナツ型、これは福岡型で、馬耕教師の持ち込んだ鞍が更新を重ねながら継承されたものです。

抱持立犂や双用犂、福岡型の鞍や藁座布団からして、抱持立犂が東北地方に与えた影響の大きさが知られます。

５．こもづち

ツチノコとかコモヅチとか呼ばれる俵編み器の振り分けで使う縄巻き兼の重りは、一般には円筒形の中程に括れをつけた砂時計形で、平安時代の米沢市の上浅川遺跡、江刺市の落合Ⅱ遺跡からも出土しています。

その一方で側面は長方形で断面が水滴形のものが秋田県羽後町、平鹿町、大内町、矢島町の土田家、山形県南陽市の北野資料館、岩手県花巻市で見かけました。

俵は古代から使われており、律令国家が全国に統一した税制を施行したことにともなって、全国的に押し広められた可能性が高いとわたしは見ています。となると俵編み器の薦槌の形の違いは、その地域への俵の伝来事情語る情報を含んでいる可能性があり、注目しています。

6．土摺臼の台座

土摺臼は戦国時代末期に中国の長江流域から伝来したもので江戸時代に入って全国的に普及します。その土摺臼は角材を十字形に組んでその上に臼を据えるのが一般的な形。ところが前回までの調査で臼の底部のような円盤の上に据えたタイプを見てエーッと驚きました。今回は秋田県の大内町・遊佐町で円盤台座を発見、このタイプの分布からは土摺臼が普及した江戸時代中期の経済圏を復原できそうで、注目しています。

円盤座土摺臼のほかにも、木摺臼をベースに分画目を刻んで全回転摺臼に作ったものが各地で見られます。これも土摺臼が普及した江戸時代中期の経済圏の復原資料ですが、あまりに多様で調査に手が回らない状態です。

7．千歯扱の脚の形

日本の農具はほとんどが中国や朝鮮半島から伝来したものですが、千歯扱は日本で発明された数少ない農具の一つです。この千歯扱の後脚は曲がった木を使うのが一般的ですが、枝分かれした股木を逆さにして逆Yの字形の脚として使った例が、岩手県滝沢村や福島県長沼町で見つかりました。このタイプの分布は千歯扱が普及した江戸時代中期の経済圏の復原資料となり注目していますが、千歯扱はこれまで注意を向けてこなかったので、昨年度の調査地域も含めて今後の調査課題です。

8．足踏みの碓

米を搗く道具として、シーソーのような角材の一方を踏んで他方の端に付いた杵で搗く碓（からうす）があり、関東以西では広く使われていますが、東北地方ではあまり見かけないなと気づきました。山川の水を受けるバッタリは見ても碓はない。他方、重い杵で搗く米搗き杵と臼は収蔵庫で見かけます。それで注意をしていたところ、福島県会津民俗館と岩手県滝沢村で碓各１台を確認しました。

9．唐竿

柄の先に取り付けた回転棒で籾や麦を打つ唐竿（からさお）という道具があり、関東以西では広く使われています。これも東北地方ではあまり見かけないので注意をしていたところ、福島県では天栄村と双葉町、岩手県では花巻市と石鳥谷町で見つけました。

碓は奈良時代、唐竿は平安時代初期の文献史料に見える農具です。この古代に伝来した農具にカラスキ（犂）、カラサオ（唐竿）、カラウス（碓）とカラ（唐）の字が付くことから、大化改新政府が全国的に普及をはかった可能性が高いとの見当をつけていました。今回の調査で犂・唐竿・碓の３つとも東北地方にはほとんどないことが確認できて、大化改新政府の普及政策の可能性が俄然確実性をおびてきました。大化改新当時は東北地方は大和の支配圏外で、政策が影響を受けなかったと考えられるからです。東北地方の民具は東北だけではなく日本全体の古代史の情報も記録しているという、いい例です。

今年度の東北地方調査はこれで一応の締め

神奈川大学の COE プログラムは２年度目で中間報告書を文部科学省に提出しなければなりません。それで 11 月 1 日締め切りで 400 字 80 枚の論文の提出が義務づけられています。昨年度は 10 回の調査でのべ 35 日、今年度は７回の調査でのべ 42 日、この間とった膨大な写真や計測データの整理を考えると気の遠くなるような作業が待ちかまえていて、再度調査に出るゆとりはありません。今年度の東北調査はこれで締めになりそうです。

年報論文が出来上がれば、抜刷をお届けする所存です。

地域ごとの庶民の歴史の復原を目指して

『古事記』『日本書紀』などの文献史料には、地方の庶民生活は書かれていません。ところが庶民の暮らしとともにあった民具の形や呼称には、その土地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として保存されています。その遺伝子を比較調査で引き出すことができれば、地域ごとの個性ある歴史の復原が可能です。そのためには日本列島全域の民具調査が必要で、その第一歩として、東北地方各地を調査しているわけです。

中部地方・関東地方の調査が必要

わずか 13 ヶ月の東北地方調査を通しても、関東地方には７世紀の百済・高句麗難民の持ち込んだ農具の影響が強いなと感じました。東北の民具から関東が見えるのです。これを逆にすれば、関東地方や中部地方の調査を進めれば、東北地方の古代史がより鮮明に浮かび上がってくることになります。東北地方の精査とともに、関東地方・中部地方に広げることが来年度以降の課題です。

最後に一言、調査にご協力ありがとうございました。

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

在来農具の比較調査・富山　05.9

2005.9／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

先日は突然の調査にもかかわらず、ご親切に対応していただき、ありがとうございました。この調査で何が見えてきたのか、とりあえずのご報告です。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では文部科学省の研究拠点形成事業の指定を受けて「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具調査歴25年の私は、“民具こそ非文字資料の代表格”と考えて、各地の民具の比較調査を進めています。

はじめての富山調査

回ったのは右表の通り。皆さんのご協力のおかげで、一息つく間もない充実した6日間でした。富山湾を囲む観客席のようなまとまりのある地形のなかに、“民具は大事、だから拒まず収集”という基本理念をもった方々が各地におられる心強い県、というのが第一印象です。

1	9月1日	木	砺波郷土資料館	高岡泊
2	9月2日	金	福岡町歴史民俗資料館	
3			高岡市立博物館	
4			高岡市農業センター	
5			清水一夫氏宅	
6			高岡市農業センター	高岡
7	9月3日	土	氷見市立博物館	高岡
8	9月4日	日	利賀民俗館	
9			平村郷土館	
10			相倉民俗館　１号館	
11			相倉民俗館　２号館	
12			村上家	
13			五箇山民俗館	
14			塩硝の館	
			井波歴史民俗資料館（休館）	
15			小矢部ふるさと博物館	高岡
16	9月5日	月	魚津市歴史民俗博物館 ①	
17			富山県農業技術センター	高岡
18	9月6日	火	富山県教委文化財課収蔵庫	
19			魚津市歴史民俗博物館 ②	

1．富山の在来犂

今回は下調べもせず突然の調査でしたが、いただいた「富山民俗の位相」（2002）や『富山県史 近世上』（1982）によれば、富山は佐伯安一、本庄清志氏らによる犂研究の先進地。これらと他県調査の結果を摺り合わせれば、富山の古代が具体的に見えてきそうです。

砺波・福岡に放寺の犂

高岡市でつくられた「放寺の犂」が砺波で16台、福岡に3台収集されていました。

魚津・富山・上市に三塚犂

斜め梶棒をもった富山の「三塚犂」は、魚津で5台、県教委の収蔵庫には富山市のが1台、上市町のが1台確認できました。

氷見に直轅長床犂

氷見には直轅長床犂が13台。これは加賀の「耕稼春秋」型長床犂と共通点が多く、前田利常の改作法の折りに普及を図ったと推定した犂（河野、1995）の祖型か、はたまた変種かなど、興味深い課題が浮上してきました。

井口犂は長野県松本近辺の犂に類似

佐伯先生の紹介された井口町の犂は、直轅長床犂で木製へらが犂先に被さる様子など、松本近辺の犂によく似ていて、朝鮮系無床犂と大化改新政府の流した政府モデル犂との混血型と見ました。

放寺の犂の起源は？

佐伯先生は、①富山の在来犂は長床犂で関西系、②慶長年間にさかのぼる馬耕の伝統は東日本系、③近世の加賀・越中の農書に描かれたのはすべて長床犂であり、④放寺の犂は岐阜の犂を参考に明治20年代に改良されたもの、とされていますが、私は違った見方をしています。

在来犂の基本形は古代に決まる

日本の在来犂は、①6世紀に渡来人が朝鮮系無床犂を持ち込んだことに始まり、②7世紀に大化改新政府が中国系長床犂に手を加えた政府モデル犂を殖産興業政策として全国的に流した。③その後7世紀後半に百済・高句麗難民が無床犂を持ち込んだ。そのため①の地域では②の波を被って朝鮮犂と政府モデル犂との混血型が生まれ、氷見や井口犂はこのタイプ、③の地区では政府モデル犂の波を被らなかったため、無床犂のまま20世紀まできた。関東周辺の無床犂はこのタイプと考えられます。

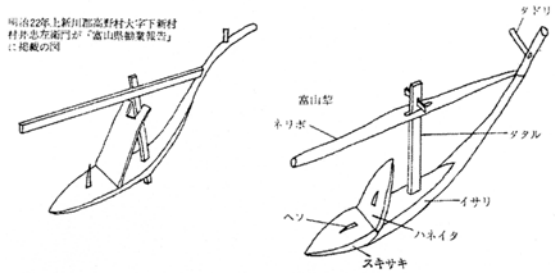
越中にも無床犂が使われていた可能性

さて佐伯先生の紹介された明暦3年の砺波・射水郡の「鋤四柄（構成部分に身すき・ねり棒・へらたたら）」

は放寺の犂系の無床犂ではないか。つまり近世から越中では長床犂と無床犂が併存していたと見られます。近江八幡や野洲でも、長床犂と無床犂が併存しています。

三塚犂・放寺の犂の改良点

三塚犂はその無床犂をベースに、抱持立犂から犂先を上下逆にしてへらとする「二枚スキ」を取り入れ、九州系の単用犂から斜め梶棒を採用したもので、放寺の犂は二枚スキ方式のみ採用したのでしょう。そこを元に戻せば、明治以前の姿が現れるはず。明治 22 年に上新川郡の村井忠左衛門が報告した犂から小刀を取り去ったものが、その原型に近いのではないか、と思われます。



3-7図　富山犂　（本庄清志『タドリガタ犂と富山スキ』より）

そして本庄論文の掲げるこのタイプの犂の部分呼称のタタル、イサリなどは『和名類聚抄』所引「楊氏漢語抄」に見える８世紀語で、起源が古代にさかのぼる可能性を十分もっています。その原型に近い犂が民具で残っていないか、今後の調査の課題です。

双用犂が多数、小矢部・砺波に抱持立犂

富山では近代短床犂は左右どちらも反転可能な双用犂が圧倒的多数、にもかかわらず抱持立犂は小矢部に１台、砺波に手製っぽいのが１台確認できただけでした。

関西は左反転単用犂、でも富山は双用犂

在来犂の無かった東北地方では、明治に不十分ながら双用である抱持立犂が席巻し、その後双用犂地帯となった。関西では左反転の在来長床犂が使われていたため近代短床犂も左反転単用犂のみとなり、双用犂は受け付けなかった。富山は左反転在来犂の伝統があったにもかかわらず双用犂となった。何で？何で？？と思ってました。

原因は農法の違い

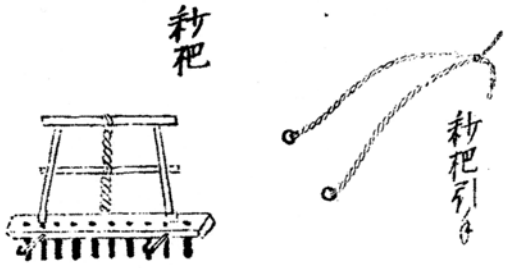
帰宅後、佐伯論文の左反転の在来犂の時は盤の子割りは鍬でおこなっていて、双用犂なら全部犂耕で済んだという指摘で納得。関西では荒起こしからすべて左反転在来犂で済ませていたので、双用犂は必要としなかった。近世では地域による農法の違いが随分あったんですね。

２．富山の馬鍬

砺波に鎌刃馬鍬

北陸に鎌刃馬鍬があることは知ってましたが、砺波の収蔵庫での圧倒的な数には驚き。新藤先生から刃は普通の刃とも取り替えて使用したと聞いて二度びっくり。その引き手が角材に鉄鈎を付けたタイプであることが気になりました。この特異な「角材鉄鈎引手」の起源は？

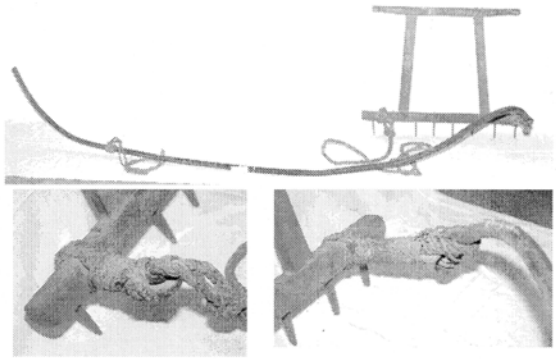
「私家農業談」に鉄鈎引手？



帰宅後、天明八年（1788）の小矢部の「私家農業談」をチェックしていたら、馬鍬の引手が鉄棒で上向き鈎のようで、「耙引手」と書かれた引綱の先には鉄環が付いている。なら角材鉄鈎引手は「私家農業談」の後裔ではないか。なら砺波の引綱に鉄環は付いていないか。これが次回砺波調査の１つのポイントです。

魚津の縄添え引手馬鍬としっちょ竹

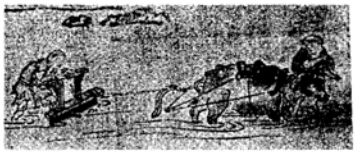
砺波の鎌刃馬鍬に対して、魚津では定型馬鍬ばかり。ここでは引綱やしっちょ竹がセットで展示されていて、しかも縄添え引手が見られたのに感激。同様の例は県農業技術センターや県教委収蔵庫にもありました。それらから、昨年山形県で見つけて以来追ってきた縄添え引手の成立事情におよその見通しが立ちました。



縄添え引手の始原は支え棒か

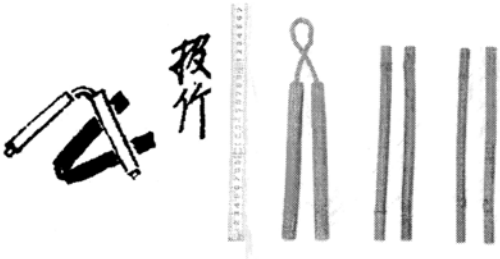
引手なし馬鍬では、引綱を毎回台木に巻き付けるのは大変。それとしっちょ竹を付ける便宜から、台木に縄を巻き付けておいて、その端を連結のための縄環とした。縄は軟質材なので垂れて前を向いてくれない。そのため

支えの小さな棒を付けた、というのが始まりのようです。



なお『富山県史』の佐伯論文に掲載された木村立嶽筆の耕作図に描かれた馬鍬の台木には、縄が掛かっている様子が描かれています。詳細は読み取れませんが、縄添え引手を描いた初の例かも知れません。

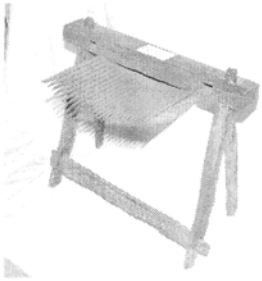
３．脱穀・調製具



県農業技術センターに「扱竹」

県農業技術センターには千歯扱に先行する扱竹が展示してあってびっくり。千歯扱は江戸時代中期に全国的にひろまったので、扱箸・扱竹類は早くから姿を消していて、扱竹の実物を見たのは今回が初めて。長さ 18.3 ㎝、径 1.7 ㎝の竹を紐で繋いだもので、『和漢三才図会』や「私家農業談」の絵とそっくりです。

小矢部に股木脚千歯扱、福岡に藁すぐり



千歯扱の台木の両端には、上下方向の穴と前後方向の穴があり、前者に前脚、後者に後脚を差し込んで使います。ところが前後穴は使わず、上下穴に俵編みの薦桁の脚のような股木を使った逆Ｖ字形の脚を付けたのが写真の小矢部の千歯扱。福岡では同形の藁すぐりを見ました。

昨年岩手県で初めて見て驚きましたが、この８月には新潟県でも見ました。いずれも分布は狭い範囲のようで、この分布域が千歯扱が普及し始めた頃の、その地域の経済圏・文化圏を表していると考えられ、注目しています。

また先に触れた木村立嶽筆の耕作図に描かれた千歯扱も、股木脚千歯扱のように見えます。

見かけなかった木摺臼

古代から籾摺りに使われてきた木摺臼は、江戸時代に土摺臼に交代され関西ではほとんど類例がありません。富山でも事情は同じようで、今回の調査では行き当たりませんでした。この点は長野県とは大違いです。

土摺臼は加賀共通の提灯型、「私家農業談」には樽型

ドロウスと呼ばれた土摺臼は、上下の摺り面が膨れたいわば提灯型で、加賀と共通する全国的には珍しいタイプです。中国にも朝鮮半島にも東南アジアにもない独自の形ですが、「私家農業談」には樽型の土摺臼が描かれていて、提灯型の前段階なのか注目されます。

唐箕と千石通しは大坂系

唐箕は１番口、２番口とも前面に並んだ西日本型。また千石通しを「万石通し」と呼ばずに「千石通し」と呼ぶのも西日本系。ナガトオシはこの地独特の呼称です。

こうしてみれば唐箕も千石通しの西日本系というか大坂系。それらが普及し始めた江戸時代中期に、越中は西廻り航路の北前船を通して大坂と結びついていたことの痕跡と考えられます。

薦槌は水滴断面型

筵編み機の薦槌は側面長方形で断面は水滴型。去年山形県で見て驚きましたが新潟県もこのタイプ。随分広い分布に驚いています。この分布は古代にさかのぼる何らかの情報を語っている可能性もあり、今後の課題です。

４．灌漑用具

螺旋水車の普及に驚き

螺旋水車は岩手県や長野県でたまに見ましたが、富山が本場だったんですね。さすが扇状地地帯。木製プーリー付きの唐箕の謎も解けました。

砺波に龍骨車２台

砺波には全長 5.36 ｍと 3.12 ｍの２台の龍骨車。中国から復員した人がつくったとかで、昭和 30 年代まで使ったとのこと。龍骨車は北中国で漢代に発明され、長江流域や東南アジアでは今でも盛んに使われています。日本には平安時代に政府が普及を図ったものの定着せず、戦国時代に再伝来して近江や大坂で盛んに使われ、滋賀県湖東地方では戦後まで使われました。

砺波の２例は原理は中国の龍骨車ながら、作りはまったく違っていて、現物を持ち帰って複製したのではなく、原理を理解して帰国後復原製作したものであることは明

瞭です。近代の技術移転を示す興味深い資料です。

県農業技術センターに泥替え桶

県農業技術センターに泥替え桶が展示されています。佐伯先生も紹介されてますが、中国で戽斗と呼ばれた灌漑用具で、西日本で盛んに使われました。これは用水路の泥あげに使ったようで、縁が摩滅しています。

５．絵画資料

「私家農業談」の唐箕の図は『和漢三才図会』が手本

「私家農業談」の唐箕の図を見てアレッと思ったのは『和漢三才図会』図とそっくり。ただ『和漢三才図会』の図は１番口だけなので、２番口を加えています。扱竹の図も『和漢三才図会』からの借用。絵画資料は手本利用が多いので、要注意です。

砺波郷土資料館に「四季耕作図屏風」の情報

砺波郷土資料館では近辺で所蔵されている「四季耕作図屏風」の情報をお持ちで写真を見せてもらいました。

狩野俊信筆のものは、久隅守景の図柄の影響をもろに受けていて、この地の江戸時代中期の文化状況を語る貴重な資料。作者不明の１点も、あちらこちらの手本によりながらも木摺臼を描いた場面など地元の様子を伝えた可能性があり、興味深い資料です。順次『民具マンスリー』に紹介していただく予定です。

木村立嶽筆の耕作図は貴重な資料

佐伯先生が県史で使われた木村立嶽筆の耕作図は、何度か触れたように貴重な資料です。佐伯先生かどなたか、『民具マンスリー』に紹介していただけないでしょうか。

以上、紙数の都合でわたしの今の関心に近い部分に限ってざっと見てきましたが、このほかにも館ごとに思わぬ資料に出会えてワクワクの毎日でした。

６．民具は地域の歴史資料

大正・昭和の民具にも、古代・中世の情報

これまで見てきたように、民具には地域社会の古代以来の歴史情報がいっぱい詰まっています。人が生きたら痕跡が残る。犯罪なら犯人が必死で証拠隠滅を図りますが、生きることはやましいことではないので、痕跡は残ってしまうのです。

前近代の人々は、飢饉や災害・疫病のなか、命を繋ぐことを最大の目標にして生きていました。農具はその命を繋ぐ道具、したがって改良によるリスクは避けて、先祖代々使ってきて安全性が証明済みの農具を、そのままの形で子孫に伝えようとしました。若者が新しいことをしようとすると年寄りに叱られるという伝統的社会の保守性の背後には、命を繋ぐことが第一という厳しい現実があったようです。そのため民具の形や呼称は 1000 年を超えて継承されることになります。

民具は失われた歴史のバックアップデータファイル

都の天皇や貴族と違って、地方の庶民は自分たちの歴史を文字記録で残す手だてを持ちませんでした。その人々が記録出来なかった生きた軌跡を、民具はいわば遺伝子として、形や呼称のなかに記録保存してきたのです。民具は失われた歴史のバックアップデータファイルです。わたしは今、そのデータを読み出して地域ごとに異なった古代・中世史を復原する作業に取り組んでいます。

データの読み出しは広域比較と地域の詳細調査から

民具の形や呼称から古代の情報を引き出すには、広域比較による分布の確認が必要です。広域比較から伝来・伝播のルートが確定でき、分布のあり方から、こうした分布になるのはいつ時代しかないと絞り込めるのです。近県はもちろん東北・関東・近畿・九州といった他地方から、できれば韓国・中国まで、調査範囲が広がるほど古く遡れます。他方、県域の詳細な調査は間違いのない推測を可能とし、正確な歴史の復原を保証します。

広域屋と地域屋の協働が必要か

広域調査は、まずはわたしのような広域屋ががんばらねばなりません。ただ県域の詳細調査となれば、これは皆さんの得意わざでしょう。お互いが情報交換しあって、いい関係の共同作業（コラボレーション）が実現するなら、文字資料からはたどれなかった、半ば諦めていた地域ごとの庶民の歴史が復原可能となります。

9/28～10/2に、富山の再調査

9/28 ～ 10/2 の４日間、高速道の IC に近い砺波に３連泊して、28 日午後は砺波郷土資料館、あとは先方と連絡をとりながら、未調査の地域を回る予定です。

ともあれお世話になりました。用事を押しのけての調査のため、整理が遅れてお礼とご報告が遅くなりました。

今後ともよろしくお願いいたします。

連絡先
自宅：〒 233-0015　横浜市港南区日限山 1-58-44-302
TEL FAX　＊＊＊＊
携帯：＊＊＊＊
メール：＊＊＊＊

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

在来農具の比較調査・富山②　05.9～10

2005.10／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

今回は富山調査の２回目、未調査の資料館をなるだけ多く回ることと、砺波の「放寺の犂」の原型を探ることを目標に出向きましたが、みなさんのご協力のおかげで、息つく隙もない充実した毎日でした。ありがとうございました。調査で分かったことの、とりあえずの報告です。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では文部科学省の研究拠点形成事業の指定を受けて「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具調査歴25年の私は、“民具こそ非文字資料の代表格”と考えて、各地の民具の比較調査を進めています。

山田村・滑川・宇奈月は単用犂地帯？

砺波は双用犂地帯でしたが、県内の他地方はどうか。

富山市山田村では、展示室および蔵のなかの民具もあわせて、放寺の犂１台、三塚犂？２台、近代短床犂の単用犂数台に対して双用犂は１台だけでした。

滑川市の東福寺野自然公園内の岩城家住宅の民具では、三塚犂２台、単用犂１台で単用犂のみ。

宇奈月町の農村文化伝承館山本家住宅では、納屋と母屋の展示民具あわせて、三塚犂２台、単用犂３台で、ここでも単用犂のみ。

こうしてみると、富山県東部では近代短床犂が出現したと時点で、左右反転可能な双用犂ではなく、左反転固定の単用犂が採用されていたらしいことになります。富山市中心部はまだ見ていないので、次回の調査課題です。

盤の子割りとの関係は？

放寺の犂も三塚犂も左反転専用の単用犂、それに使い慣れた人は、近代短床犂でも単用犂を採用するのが素直な選択、にもかかわらず双用犂を採用したのは、「双用犂なら鍬で盤の子割りをしなくて済むから」という佐伯先生の説明があります。なら県下の単用犂地帯は盤の子割りをしていなかった、ということになるのかな？

富山県下での盤の子割りをやった地域とやらなかった地域の分布図と、県下の単用犂・双用犂の分布図を作って、重ね合わせてみる必要がありますね。また「耕稼春秋」の膝元の加賀では双用犂なのか、これも課題です。

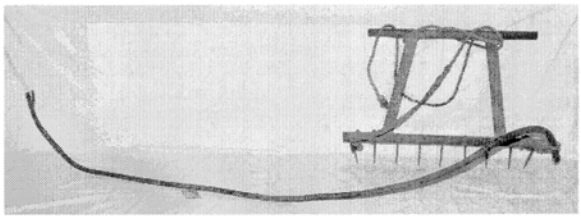
1	9月29日	木	砺波郷土資料館	
2			砺波市　出町収蔵庫	砺波
3	9月30日	金	山田村歴史民俗資料館	
4			砺波郷土資料館	
5			砺波市　出町収蔵庫	砺波
6	10月1日	土	砺波市 般若民具室	
7			庄川霞堤	
8			新藤正夫氏宅	
9			砺波郷土資料館	砺波
10	10月2日	日	宇奈月町歴史民俗資料館	
11			農村文化伝承館　山本家	
12			滑川市立博物館	
13			東福寺野自然公園　岩城家	
14			立山町郷土資料館	帰宅

山田村に股木引手・板穴引手の馬鍬

山田村では股木鈎を引手とした馬鍬と鎌刃馬鍬、それに板穴引手の馬鍬が確認できました。股木引手は長野県から関東地方に広く見られる形態で、板穴引手は引手なし馬鍬から進化した縄添え引手から派生したもの。別種の馬鍬の混在から、村の歴史が何か見えてきそうです。

宇奈月・滑川では、縄添え引手＋竹びっちょ

宇奈月の山本家住宅では、丸棒台木に縄添え引手の馬鍬と弦長２ｍの「竹びっちょ」がありました。滑川の岩城家住宅でも同じ組み合わせを確認。これは前回魚津や県農業技術センター・県教委収蔵庫で見たのと同系統で、引手なし馬鍬の発展型という見当をつけています。



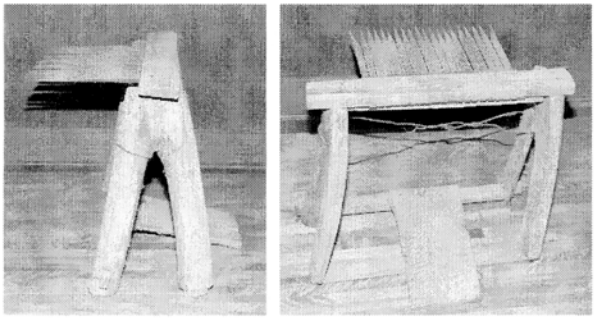
馬鍬の引手は、地域ごとの伝来時期をさぐる重要なカギ

馬の左側は根曲がり竹で牽引するのは福島県にも見られて広域に分布しているようで、正確な分布の把握から伝播の中心や経路、時期が確定できると期待しています。

馬鍬は５世紀で中国江南地方から導入されたと考えられますが、江戸時代には青森から薩摩まで全国で使われていたので、伝来間もなく全国的に広まったというのがこれまでのイメージでした。引手なし馬鍬や縄添え引手の発見は、そのイメージに大きな修正を迫っています。

滑川に股木脚千歯扱

前回の調査で、小矢部で股木脚千歯扱、福岡では股木脚の藁すぐりを見つけましたが、今回は滑川の岩城家住宅で股木脚千歯扱を見つけて内心ヤッターと叫びました。



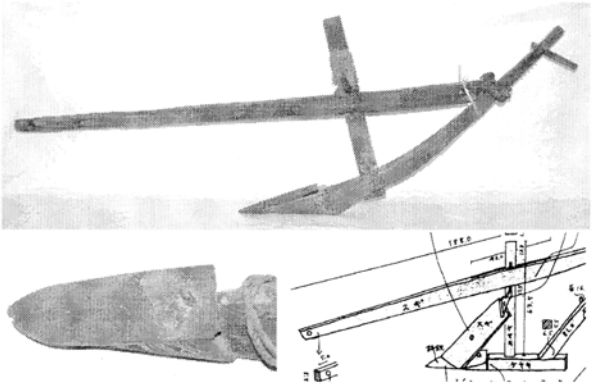
岩手県で初めて見てから、時たま見かけますが、分布は島状で広くなく、相互に関係もなさそうです。千歯扱は歯付きの台木で取引され、脚は自分で付けました。説明なしに受け取った人々が、俵編み機をヒントに股木脚を付けるのはごく自然な対応なのでしょう。近世後期のモノと情報の流れの実情を探る手がかりとなる資料です。

「放寺の犂」の原型は、砺波の古代を語る資料

放寺の犂は福岡県の抱持立犂から犂先を上下逆装着して犂へらとする「二枚スキ」方式を採用したもの、その原型はどんな形だったのか。砺波地方のさぐる重要な手がかりです。ところで砺波郷土資料館には放寺の犂類だけで 16 台、これだけあれば、その原型が見つかるはずと期待しての２度目の調査でした。

見つかった原型犂

訪ねるや早速、民具担当の般林雅子氏から、21 台の単用犂計測表のなかで犂身・犂柱・犂轅・犂先の長さが一般の放寺の犂よりも大きくて重い３台を抽出して「これは別のグループでは」と示されました。これこそまさに明治の改変を受けていない原型犂、計測調査の有効性が証明された事件でした。



原型犂は朝鮮系・政府モデル系の混血型

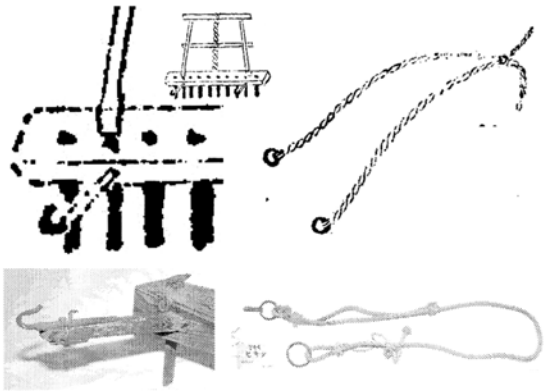
写真はその１つ№ 2278 犂で、長さ 204 ㎝の下降直轅で、犂轅・犂身・犂柱が三角枠をつくるのは朝鮮系無床犂の系統、ところが長さ 42 ㎝の明確な犂床があり、加えて犂身上部に前後に伸びた把手をもつのは、大化改新政府が全国に流した政府モデル長床犂の系統で、つまりこの原型犂は朝鮮系と政府モデル犂との混血型と考えられます。また左下図の№ 2281 犂には般林氏の指摘のように犂先上面に斜めに横切る錆跡があり、細棒が突き出ています。これは佐伯先生の紹介された井口犂（右下図）のように左反転の板へらが付いていた痕跡で、これも政府モデル犂の一木犂へらを真似たものです。

６世紀渡来人の持ち込みか

これらの形態から、大化改新以前には砺波付近ではすでに朝鮮系無床犂が使われていたと推定でき、朝鮮系渡来人がこの近くに入植していたと考えられます。

「私家農業談」の鉄鈎引手・鉄環引綱の継承

前回の調査のあと、宮永正運「私家農業談」（1788）に鉄鈎引手と思われる馬鍬が描かれていること、また引綱には鉄環が付けられていることに気づき、それが民具に継承されているかの確認が今回調査の課題でした。



「私家農業談」の引手をよく見れば、角材の先に鉄鈎を付けたように描かれており、まさに砺波の馬鍬の角材鉄鈎引手の祖型でしょう。また鉄環つき引綱は、そのままの形で使われています。

民具は失われた地域史のバックアップデータファイル

地域に生きた祖先たちは、自分たちの歴史を文字記録で残す手だてを持ちませんでしたが、民具はかれらの生きた軌跡を、形や呼称のなかに記録保存しています。その情報の読み出しと、だから民具は大切とのアピールが、いま重要な課題と考えています。

来週には、富山近辺を回る予定です。三塚犂の原型が見つかればいいのですが。

神奈川大学COEプログラム“人類文化研究のための非文字資料の体系化”

在来農具の比較調査 ― 山梨・長野諏訪郡

2006.9／神奈川大学経済学部教授　河野 通明

お世話になりました

民具調査は行って見てみないと収集状況などが分からず、お忙しい中の押しかけ訪問になりがちですが、みなさんのご協力のおかげで、充実した毎日でした。ありがとうございました。調査で分かったことの中間報告です。

神奈川大学の“非文字資料”研究の一環

神奈川大学では文部科学省の研究拠点形成事業の指定を受けて「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。

民具調査歴26年の私は、“民具こそ非文字資料の代表格”と考えて、各地の民具の比較調査を進めています。

尖石縄文考古館では、棚畑遺跡の平安時代の鍛造V字形犂先を見せてもらいました。古代犂の重要資料です。

1．朝鮮系の無床犂

巨摩郡の三角枠無床犂

山梨県巨摩郡に三角枠無床犂があることに注目していました。なぜなら三角枠無床犂は朝鮮系で、これまでのわたしの研究では、純粋な朝鮮系犂のあるところは7世紀後半の百済や高句麗難民の入植地と考えられ、それが「巨摩郡」という郡名とうまく符合するからです。

2004年8月の第1回調査では、富士見・大泉・豊富・早川で三角枠無床犂を確認、東八代郡の豊富村では2人が向き合って鍬のように使う人力犂も確認できました。

甲府盆地にも大月・富士吉田にも

2006年6月の第2回調査では、小淵沢で1台、山梨県立博物館の資料カードで4例を確認、甲府近辺のものとのことでした。甲府市民俗資料館では屋根裏で犂身のみの資料を確認、春日居では完形品2例が見つかり、甲府盆地中心部にも広がっていることが確認できました。

2006年8～9月の第3回調査では、大月でも富士吉田でも確認、北都留郡、南都留郡まで広がっていることが確認できました。富士吉田では2人で使う人力犂もありました。神奈川県小田原市では三角枠無床犂と人力犂が確認されており、百済・高句麗難民の持ち込みと考えられる三角枠無床犂が、甲斐の巨摩郡から甲府盆地・都留郡を経て相模の小田原まで、広汎に分布していたことになります。

2004.8

8月1日	日	山梨	韮崎市民俗資料館
			大泉村歴史民俗資料館
8月2日	月	長野	高遠町教育委員会
			高遠町民俗資料館
			高遠城
			高島城
			諏訪市教育委員会
8月3日	火		諏訪市博物館
			諏訪大社上社本宮
			市立岡谷蚕糸博物館
			茅野市八ヶ岳総合博物館
			富士見町歴史民俗資料館
8月4日	水	山梨	山梨県教委　博物館建設室
			豊富村郷土資料館
			中富町歴史民俗資料館
			早川町役場
			早川町郷土資料館

2006.6

6月15日	木	山梨	山梨県立博物館
6月16日	金	長野	尖石縄文考古館
			原村歴史民俗資料館
		山梨	春日居町郷土館
6月17日	土		小淵沢郷土資料館
6月18日	日		甲府市民俗資料館
			春日居町郷土館(2)

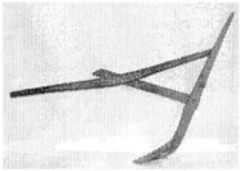
2006.8-9

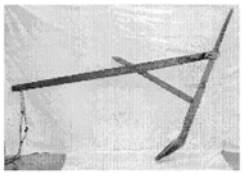
8月29日	火	山梨	山梨県立博物館（常設展見学）
8月30日	水		大月市郷土館
			富士吉田市歴史民俗博物館
8月31日	木		原村埋蔵文化財収蔵庫・郷土館
9月1日	金		南アルプス市教委文化財課
9月2日	土		ゼミ合宿：信玄堤・御勅使川
9月3日	日		ゼミ合宿：躑躅ヶ崎館・要害山
9月4日	月	長野	富士見町立落合小学校 岩本記念館

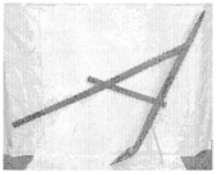
人力犂のバラエティーとその成因

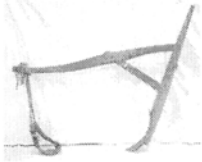
南アルプス市では、夫婦犂と紹介されてきた人が牛馬代わりに引く人引き犂が主で、犂体が木製から鉄製へと進化をとげる様子のわかる資料群で驚きました。

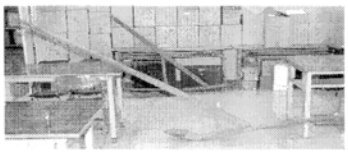
人引き犂も2人で鍬のように使う人力犂も、これまでは地形や土質に適応した結果生まれたと説明されてきていますが、わたしは7世紀の戦争難民が異国に入植したときの苦労の痕跡である可能性が高いとみて調査中です。


小淵沢郷土資料館


春日居町郷土館

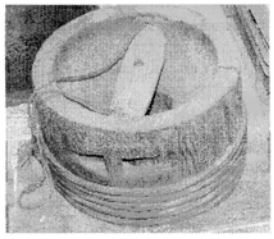

大月市郷土館

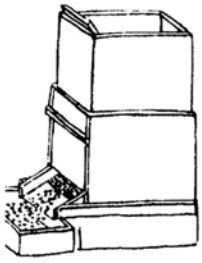

南アルプス市の人引き挽


富士吉田市の人力挽

山梨県・長野諏訪郡の三角枠無床挽

原村の中抜きの全回転臼


木っ端詰めの往復回転臼


『和漢三才図会』の千石通し

落合小の「通し」

2．長野・山梨県で展開する木摺臼

稲籾から籾殻を外す籾摺り作業には、古代から朝鮮系の木摺臼が使われてきました。２人で左右の縄を引き合う往復回転の籾摺臼です。これに対して江戸時代には中国から全回転の土摺臼が入ってきて木摺臼に置き換わっていき、関西では民具の木摺臼は皆無といった状況です。

ところが長野県・山梨県は、明治以降も木摺臼が進化をとげつつ現役の座を占め続けたという特異な地域です。

３種の特異な木摺臼

これまでの調査では、進化した木摺臼におもに３つの形態があります。

① 寄せ木造りの 60 ㎝級の大口径木摺臼。② 上下臼の摺り面を桶構造でタガ締めにした木摺臼。③ 50 ㎝台の口径の側部分を松材の寄せ木でタガ締めにした中抜きの全回転臼。これら３種はいずれも学界では知られていないもので、いずれ論文で報告する予定です。

調査で明らかになった内部構造

これら３種のうち、山梨県や長野諏訪郡にあるのは②と③ですが、②は山梨県立博物館の収蔵庫で壊れかかった個体から、摺り面を木っ端詰めしたことが判明、甲府市民俗資料館と原村埋文収蔵庫で再確認できました。③は中心部が空洞なため、どうして使ったか皆目分からなかったのですが、平出一治氏の説明で納得がいきました。

３種に共通するのは大樹の伐採をできるだけ避けて資源を大事に使っていこうという強固な思想。明治・大正期に現代顔負けの省資源思想が山梨・長野で育ったのはなぜか。これは皆さんに考えていただく課題です。

3．落合小に最古の千石通し

第３回調査で拠点にしていた神奈川大学の富士高原見研修所の職員の方から、出身校の落合小に民具の展示室があるとの情報を得て、早速伺いました。そこで見たのが享和二年（1802）銘の千石通しです。

『和漢三才図会』（1713）に載せられた千石通しは、じつは農具ではなく台所用具だった、そのことを昨年『民具マンスリー』に書いたばかりです。

この『和漢三才図会』タイプの千石通しは残存例が少なく、いまのところ登呂博物館の２例だけですが、落合小のはそれに次ぐ３例目で、しかも享和二年（1802）というダントツの古さで最古の千石通しとなります。いずれ『民具マンスリー』で全国に紹介したいと思います。

4. 民具は地域の歴史のバックアップデータファイル

『日本書紀』や『古事記』は都の天皇や貴族のことしか記録していません。ところが庶民とともにあった民具は、壊れても同じ形で更新されるため、古代いらいの庶民生活の情報をバックアップ保存してくれていたのです。ですから民具は地域アイデンティティーを探るための最重要資料、国や県に頼らず、地域住民の手で「地域遺産」「住民遺産」として守っていかなくてはなりません。

地域の事情に詳しく、民具を守る立場にある皆さんと、地域にはめっぽう暗いが全国比較のできるわたしのような研究者が協力すれば、民具から地域それぞれの個性的な古代・中世・近世・近代史の復元が可能です。

こんな楽しい取り組みを、一緒にやってみませんか。